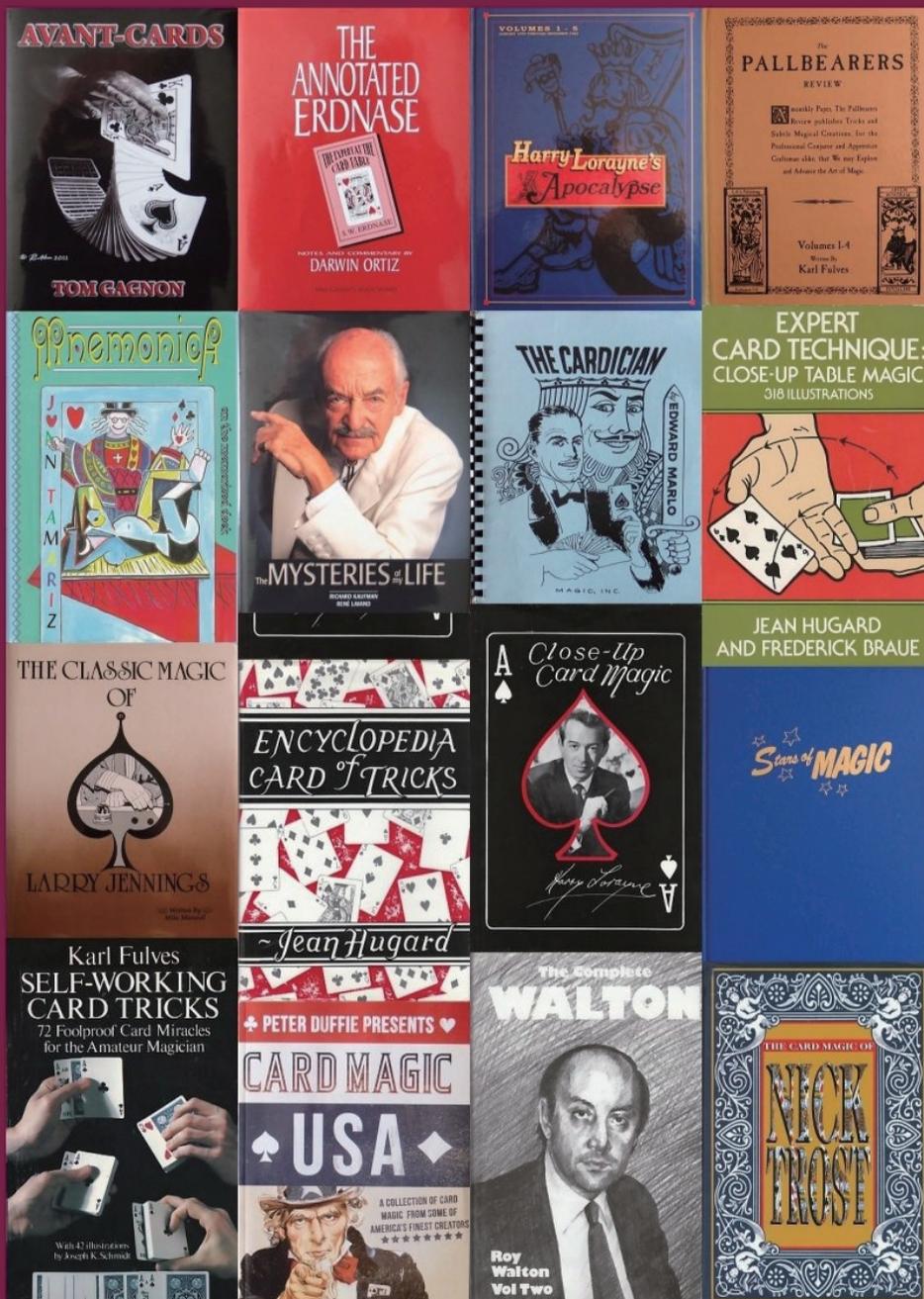


Card Magic Magazine



No. 27

July 4, 2014

by Hideo Kato

カードマジック徹底研究

変化現象

変化現象はカードマジックの中でもっとも古くからあり、多くのやり方があり、そしていちばん多用されているものではないでしょうか。1584年発行の'ディスカバリーオブウィッチクラフト'には、デッキのボトムにJを出現させて、Jが4枚出現したあと、それらが4枚のAに変化するという、今日の'ギャンブラー対マジシャン'の原形とも言われるものが解説されていました。

'ワイルドカード'をきっかけとしたパケットトリックの流行は、変化現象からあらゆる可能性を引き出してきました。なぜ変化現象がそのように好まれてきたのでしょうか。

それは現象が表現しやすいからであり、理解しやすいからに違いありません。たとえばカードをなげるだけで変化する、'カラーチェンジ'なら、誰が見てもその現象を理解することができます。頭で何かを考える必要などありません。ぼやっと見ているとわかるのです。

そのように表現する側も、見る側にとっても容易であるということが、じつは変化現象の魅力を最大限引き出すことを邪魔する可能性があるということに、この特集をまとめるにあたって思いあたりました。たとえば'エースアSEMBリー'を演じた最後に4枚のAを裏向けにすると、青裏だったのが赤裏に変化していたとします。それを見た瞬間、観客は驚くでしょう。目は驚くとしても、はたして心はどのように感じるのでしょうか。

もしもその変化現象が本当に強烈な不思議さをもたらすのだとしたら、そのまえに演じたアSEMBリー現象はどこかに吹き飛んでしまいます。Aが集まることの面白さを見せたいから'エースアSEMBリー'を演じたのではないのでしょうか。

私はこの特集をまとめるにあたって、カラーチェンジのような単純な変化現象や、他の現象のあとに唐突に変化するようなものは含めませんでした。Part 1には、選ばれたカードを現す変化現象、Part 2には、複数のカードが特殊な意味を持つ組み合わせのカードに変化する現象、Part 3には、その他の起承転結のめりはりのきいた変化現象を収録いたしました。

おそらくそれらをお読みになって、変化現象にそれだけ多くの作品があるのかと驚かれるかも知れませんが、じつは"Card Magic Library"全10巻の中には、すでに多くの変化現象作品が収録されています。変化現象こそ、カードマジックの王道であると思います。

たんに変化現象を単純に見せるだけでなく、変化という強烈な現象をより面白く、より印象的に演じるように磨き上げていただきたいものです。

Part 1 選ばれたカードへの変化現象

オブザベーションテスト

= 考案者不詳、“ロイヤルロードトゥーカードマジック”、1948年 =

この作品は、選ばれたカードへの変化現象としては、いまやクラシック的な存在です。グライドでカードをすり替えるという、原理としては平凡だと感じられるかも知れません。しかしながら、色の順に気をとらせておいて、数がいくつだったかおぼえているかと問いかける、演出の大切さを見逃してはなりません。そして備考でお話する、演技の終わり方についても考えさせられる作品です。

* 方法 *

1. デックをシャフルしてから、1枚のカードを抜かせ、おぼえさせます。そのカードをデッキに返させたら、ボトムにコントロールします。
2. 表を自分に向けてデッキを広げ、4枚の2のカードを見つけて、黒、赤、黒、赤の順でフェースに運びます。「これはあなたの観察力のテストです。4枚の2のカードを使います」と説明します。
3. フェースの5枚のカードを取りますが、何枚取ったかわからないように取ります。それらを裏向きにしてグライドの位置に持ちます。トップが選ばれたカードで、下の4枚が2のカードです。
4. 「これから見せるカードの色の順番をおぼえてください」と言って、右手でボトムカードを抜いて、テーブルに表向きに置きます。「赤」とその色を言います。
5. つぎのカードをボトムから取り、「黒」と言いながら表向きにテーブルのカードの上に置きます。
6. つぎはグライドを行い、右手でトップの2枚を重ねたままつかみ、ずれないようにして表向きに返して、先に置いたカードの上に置き、「黒」と言います。
7. 最後のカードを取りながら、「そしてもちろん最後は赤です」と言って、表向きにしてテーブルのカードの上に置きます。4枚の2のカードを見せました。それらを取り上げ、表を自分に向けてそれらを混ぜますが、枚数がわからないようなやり方をします。選ばれたカードがトップから3枚目に運んで混ぜるのをやめます。「よく混ざりました」と言って、ポケットを裏向きにして、グライドの位置に持ちます。
8. 「もういちどやりましょう」と言って、ステップ4からステップ6までを繰り返します。そうすると1枚のカードが左手に残ります。それは選ばれたカードです。

9. それを裏向きのまま右の方に置きます。他のカードを取り上げて、裏向きにしてデッキの上に返し、デッキを左手に持ちます。「ここであなたの観察力を試します。私は2のカードを置くとき、色の順番をおぼえてくださいと言いました。でもそれはひっかけでした。あなたは最後のカードのマークがわかりますか」と問いかけます。そのように言うとき、さり気なくデッキをカットしてして、他のカードがどこにいったかわからなくしてしまいます。

10. 相手は正しいマークを言うかもしれませんが、間違えるかもしれません。いずれにしても「あなたは色に気をとられていたので、カードの数はおぼえていないでしょう」と言います。ここで相手が選んだカードを告げさせ、それからテーブルに置いてある1枚を表向きにして、選ばれたカードであることを見せます。

* 備 考 *

以上の方法の説明は、原著からの忠実な翻訳です。著者のヒューガードは、3枚目までに置く2が何のマークであるべきか指摘していません。解説の脈絡からすれば、マークのことは意識してやっていません。

このマジックがマジックカフェで取り上げられたとき、最後の1枚が相手の選んだカードと同じマークの2であるべきだという意見が出ました。そうしなければ、色やマークは観察していたが、数は観察していなかったという、ストーリーに適合しないからだということです。

はたしてそうでしょうか。ヒューガードの説明した通りに演じたらとしたら、一般の観客はそのようなストーリーを感じ取るでしょうか。少なくともヒューガードの解説の中には、そのようなストーリーを印象づける表現がありません。

あえて選ばれたカードのマークを最後に残すとしたら、つぎのようなやり方もありません。

2回目にカードを混ぜるときに、トップに選ばれたカードと同じマークの2、トップから3枚目に選ばれたカードとします。これで選ばれたカードと同じマークの2は隠れ、最後に選ばれたカードが残ります。

そして最後の1枚が残ったところで、「あなたは最後のカードのマークがわかりますか」と問いかけて、相手が答えたら、最後のカードの表をちらっとのぞいて、「よく観察していましたね。たしかにハートです」と、そのカードのマークを言います。そして、「ではこのカードの数はおぼえていますか」と問いかけます。相手は「2」と答えます。

「ちょっと観察力が足りなかったですね。もしかして先ほど選んだカードはハートの10でしたか」と、選ばれたカードの名前を言います。相手は肯定します。「そうです、これがハートの10なんです」と言って終わります。

この備考を書いたために、まことに重要な発見がありました。「あなたの選んだカードは何でしたか」とたずねるところを、「もしかして先ほど選んだカードは〇〇の××でしたか」とたずねる、という手法の発見です。

そのニュアンスの違いを説明しようかと思いましたが、文章ではうまく説明できそうにありません。少なくともカードを名乗らせてから現すやり方は、最初からそうなるという雰囲気になり、「もしかして」というやり方は、思いがけなく選ばれたカードが現れた、という雰囲気になるような気がします。

ところでヒューガードはなぜ、最後のカードを裏向きにテーブルに置いたあと、残りのカードをデッキのトップに置いて、カットして処理したのでしょうか。

相手が残りのカードに手を伸ばして、調べられるのを事前に防ぐためだと思いますか。そのように考える人は、'エンドクリーン症候群'にかかっている可能性があります。

表向きのカードがテーブルに残っていると、「もしかするとあの中にさっきのカードが入っているかもしれない」と気づかせる可能性があるから、という考えも浮かびます。

マジックのクライマックスを見せるときに、余分なカードがテーブルにない方がいい、という考え方もあります。その方が、選ばれたカードにスポットライトが当たった感じで終われます。

いずれにしても、デッキの上に置いてデッキをカットするところまでは、やり過ぎのような気がします。せめて裏向きのカードに注目を集めて、そのカードについてのやり取りをしているとき、さり気なくテーブルのカードを裏向きにして、デッキのトップに置くだけの方がよいと思います。

デッキの上にカードを置き、デッキを取り上げ、そしてデッキをカットして、またテーブルに置くというのは、エンドクリーンにしようとして、演技としてはエンドダーティになっているのではないかと、私は思います。

そうであるかどうか、いま結論を出す必要はありませんが、パフォーマーとしては、そのようなことまで考えた上で、演技を磨き上げるという姿勢が望まれます。

最後に、このトリックの中で使われている、グライドによってカードを隠すというカウント方法の出典について付記しておきます。今日'クリストエーゼズ'と呼ばれるエースアセンブリートリックでこの技法が使われていますが、そのトリックはヘンリー・クリストが1914年発行の雑誌"マガジンオブマジック"に、'オメガカードトリック'として発表したもので、その解説の中で、クリスト自身がその技法を考案したと書いています。

3人の証人

= 加藤英夫、1998年2月4日 =

これは“Card Magic Library”第1巻に収録した、ペルシ・ダイアコニスの‘ラカルタダイアコニス’の、ハンドリングのバリエーションです。

* 方法 *

3人の客に1枚ずつ選ばせ、それらをトップにコントロールします。上から1人目、2人目、3人目のカードがコントロールされたとします。デッキを広げて適当な位置から3枚のカードを抜き出し、それを1人目の客に渡して、その客だけに3枚の表を見てもらい、その中にその客のカードがあるかどうかききます。つぎに2人目の客に3枚をまわしてもらい、2人目の客のカードがあるかどうか見させます。同様に3人目の客に見てもらいます。3人とも自分のカードはないと答えます。

その間にあなたはトップの3枚の下にブレイクを作っておきます。客に見せた3枚を裏向きに右手のビドルポジションに持ち、デッキの上ののせてブレイクの上の3枚とそろえて取ります。左親指で右手のトップカードをデッキの上に引いて取り、つぎのカードをその上に引いて取ります。右手には4枚のカードがあります。それをデッキの上ののせて、いま取った2枚とそろえて取る振りをして、その4枚だけを右手に取ります。以上の動作を行うとき、「1枚、2枚、3枚」と声を出して数え、「この3枚の中には3人のカードはありませんでした」と言います。デッキをテーブルに置きます。

「私が魔法をかけると、3枚のカードが変化します」と言って、カードに対して魔法をかけます。「皆さんのカードに変化しているかどうか見ていただきましょう」と言って、右手のトップカードを左親指で引いて取り、つぎのカードをその上に取り、最後の2枚をその上に取りますが、3枚を広げた状態に取ります。この状態で2人目の客だけにカードの表を見せ、その中にその客のカードがあるかどうかたずねます。その客は「ない」と答えます。

カードをそろえてから、また先ほどと同じ広げ方をします。上から1枚、2枚と取って、最後の2枚をダブルで取る広げ方です。そしてカードの表を1人目の客に見せて、彼のカードがあるかどうかききます。「ない」と言います。カードをそろえ、同様の広げ方をして、3人目の客に見せて、彼のカードがあるかどうかききます。「ない」と言います。

「まだ3人のカードは変化していません。3人のカードを変化させるには、もっと強力な魔法が必要です」と言って、先ほどより大げさな魔法のかけ方をします。3人目の客のカードを名乗らせます。手元のポケットのトップカードを表向きにして、その客のカードであるのを見せます。このカードを表向きにテーブルに置きます。

2人目の客のカードを名乗らせます。つぎのトップカードを表向きにして、残りの2枚の上ののせ、

その客のカードであることを見せます。上の2枚をプッシュオフして、2枚を取って、先にテーブルに置いてあるカードの上に置きます。そして1人目の客のカードを名乗らせ、左手に残っているカードを表向きにして見せます。そしてテーブルの上のカードの上に投げるようにして置きます。

デュアルディスカバリー

= フランク・ガルシア、“ミリオンダラーカードシークレッツ”、1972年 =

* 方法 *

2人の客に1枚ずつ選んでおぼえさせ、返してもらったらトップにコントロールします。トップから2枚目が1人目のカードで、トップが1人目のカードとします。

「2枚のカードを使います」と言って、トップから2枚取る振りをして、3枚目をアデクションして3枚取ります。デッキはわきに置きます。

1人目の客に向けて、トップカードを押し出して2枚のように広げ、表を客に向けて、「あなたのカードがありますか」とたずねます。客は否定します。カードをそろえます。

2人目の客に向きながら、ボトムカードをバックルして2枚のように広げ、表を客に向けて、「あなたのカードがありますか」とたずねます。客は否定します。

カードをそろえ、表を観客の方に向けて、バックから1枚スチールしてフェースに置く、カラーチェンジを行います。そしてバックルして2枚に広げ、2人のカードに変化したのを見せます。

* 備考 *

以上は翻訳ではありませんが、原著の解説に忠実に書きました。肝心なことが抜けています。カラーチェンジを行うまえに、2人の客のカードを名乗らせておくべきです。2人にだけ見せているなら原著通りでよいかもしれませんが、その他に観客がいる場合には、選ばれたカードを名乗らせるのは定石です。

私はこの作品の存在を知らずに、前述の「3人の証人」を考案いたしましたが、原理的には同じです。ハンドリング違いの部分の意義と、3人に対して演じた方がよいのではないかと思ひ、両者を収録いたしました。

絶対に違うカード

= 加藤英夫、2004年1月23日 =

ラズロ・ロスバート著、" デックインハンド "(1940年)という本を読みましたが、読んでもほとんどのマジックが理解できませんでした。カードマジックの本を読んで、書いてあることが理解できないという経験は初めてです。この本の中につぎのような現象のトリックが出ています。

2人の客に1枚ずつ取らせて、それらがデッキに戻されたあとシャフルされ、それからマジシャンは2枚のカードを見せて2人のカードだと言いますが、それらは2人のカードではありません。そこで2人の選んだカードを名乗らせます。そして持っている2枚のカードを表向きにすると、まさに2人の選んだカードに変化しているのです。

この現象の説明を読んで、てっきり私が前に考えていた、aさんのカードをbさんに見せ、bさんのカードをaさんに見せ、それぞれに自分のカードではないといわせたあと、2枚をすり替えて、それぞれの客のカードに変化したように見せる、というやり方と同じだと推測しました。

方法の解説を読んでわかったことは、私が推測したやり方ではないということだけでした。この難解な本を読んだおかげで、まえに自分が考えたことを思い出しました。そしてそれをもとにして、以前より進歩したトリックに改良することができました。それが以下のトリックです。

* 方法 *

2人に選ばせたカードをトップから1枚目と3枚目にコントロールします。トップが2人目のカードです。1人目があなたの右、2人目があなたの左にいます。

1人目の客に向かってダブルターンオーバーして表を見せ、「これがあなたのカードですね」と言います。相手は否定します。「おかしいですね。あなたのカードだと思うんですが」と言いながら、2枚を裏向きに返して、上の1枚を1人目の前に置きます。

ダブルカットでトップカードをボトムへ移します。それから2人目の客に向かい、ダブルターンオーバーして表を見せます。「これがあなたのカードですね」と言います。相手は否定します。「おかしいですね。あなたのカードだと思うんですが」と言いながら、2枚を裏向きに返して、上の1枚を2人目の前に置きます。

「それでは魔法を使ってこの2枚を2人のカードに変化させます」と言って、左右の手に1枚ずつ取ります。左手のカードを左の客だけに見せて、「もういちど確認しておきましょう。これはあなたのカードですか」とたずねます。相手は否定します。左手を下ろして右手に近づけつつ、体を右の方に向けつつ右手を上げて、右手のカードを右の客だけに見せ、「これはあなたのカードですか」とたずねます。相手は否定します。

右手を下げて左手に近づけ、体も正面に向けます。思い直したように右の客の方に向きつつ、右手のカードと左手のカードをすり替えて、右手のカードを水平に保ったまま右の客の前にさし出します。そして「あなたのカードは何でしたか」とたずねます。相手が答えたら、右手のカードを表向きにして、右の客のカードに変化したのを見せます。左の客に対しても同じように行います。

ポストイットカード

= 加藤英夫、1996年10月 =

このマジックの原型は、“GREATER MAGIC”に出ている切手を使うマジックであり、切手をポストイットに置き換えただけのものです。

* 準備 *

15mm～20mmぐらいの幅のポストイットを使います。スペードのJを図1のように、使うポストイットの幅で、長さ3cmぐらいを切り落とします。デッキの中から絵札を集めてトップ部分に置き、トップにスペードのJを切り込みを手前に向けて置きます。デッキをケースに入れておきます。



* 方法 *

デッキをケースから取り出し、下半分をカットしてオーバーハンドシャフルしますが、1枚目をインジョグし、シャフル後にインジョグより下を上まわして、セット部分がトップに戻るようにします。

カードを広げて相手に1枚抜かせますが、絵札部分より下の字札を取らせます。相手がカードを見ている間に、デッキをスウィヴルカットして、左手のカードの上に相手のカードを返させ、その上に右手のカードをのせます。ここでカードを2、3回ドリブルオフします。

デッキを表向きにして、クラブのJがフェースにくるようにカットしますが、フェースが観客に見えないようにします。クラブのJの手前エンドは切り込みがあるので、そこからカットするのは簡単です。

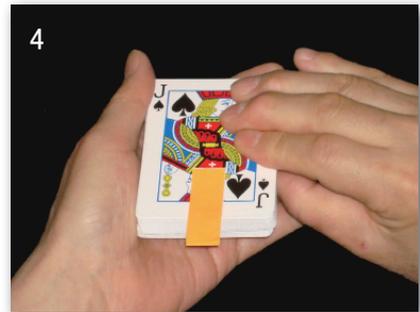
切り込み部分を図2のように右手の指先で押さえてデッキをつかみ、ボトムカードの表を相手に向けて、「このカードはあなたのカードですか」とたずねます。相手は否定します。



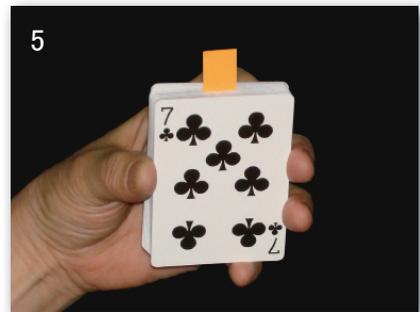
デッキをもとに戻し、やや表を手前に向けて持ち、「このカードにポストイットを貼ります」と言って、ポストイットを図3のように切り込みのラインに合わせて相手のカードに貼ります。クラブのJにかからないように注意のこと。



デッキを右手で図4のようにつかみ、デッキを立てて、ポストイットが貼られたと思われるカードの表を観客に見せます。



デッキの向きを戻して表を上に向け、まん中からカットします。それからデッキを図5のように持ち直します。



ポストイットを持ってカードを引き出します。完全に引き抜いたら、相手のカードを名乗らせます。そしてポストイットをぐるっとまわして、相手のカードの表を観客に向けます。

変身ルーム

= 加藤英夫, 2002年9月17日 =

* 方法 *

始めるまえにボトムカードを見ておぼえておき、キーカードとして使います。ヒンズーシャフルしてストップをかけさせ、左手のいちばん上のカードを相手に取らせ、見ておぼえてもらいます。そして左手のカードの上に戻してもらい、その上に右手のカードを重ねます。キーカードが相手のカードの上にくっつきました。このあと何回かカットして、いかにもカードを混ぜたように見せてもかまいません。

「あなたのカードを見つけます」と言って、表を自分に向けて広げ、キーカードがいちばん手前にくるように分けてカットします。相手のカードは表向きの状態でいちばん下に運ばれます。

デッキを表向きに持ち、ボトムカードを指さして「これがあなたのカードです」と言います。相手は否定します。「ということは、あなたのカードがこのカードに化けているのです。もとの姿に戻すには、こちらのケースを使います」と言って、ケースを取り上げて、図1のようにデッキを表を相手の方に向けてケースに入れます。



デッキがケースに半分ぐらい入ったところで、いちばん手前の選ばれたカードを左人さし指で引いて、図2の位置までずらします。完全にケースの中まで入れる必要はありません。



図2の状態で思い直したかのように、デッキをケースの外に出し、図3のようにボトムカードをふたたび観客に見せて、「このカードを忘れないでくださいね」と言います。少しケースを前方に傾けていると、選ばれたカードはケースの中に落ちて、ケースの観客側の方に収まります。



それからまたデッキをケースの中に入れますが、選ばれたカードよりも手前に入れます。ケースのフタを閉じます。

相手のカードが何であったかをたずねてから、ケースに対して魔法をかけます。そしてケースからデッキを引き出して、表面のカードが相手のカードに変化しているのを見せます。もちろんデッキを引き出す部分が見せ場ですから、ドラマチックにやってください。

* 備 考 *

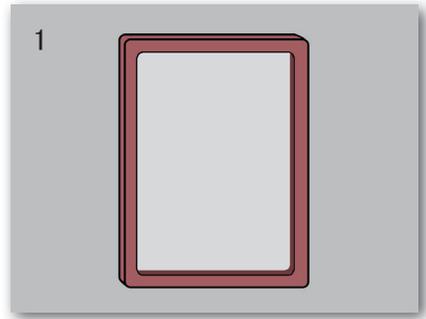
あらかじめ1枚のカードをケースに残してスタートし、マジシャンも1枚選んでおぼえる振りをして、マジシャンはケースに入れておいたのが自分のカードだと宣言して、それを1回目で現し、つぎに相手のカードを現す、というやり方もできます。その場合は、マジシャンのカードを現すためにデッキをケースに入れて出すときに、相手のカードをケースに残します。

鏡の中で

= 加藤英夫、1999年2月26日 =

* 準備 *

カードがぴったり入る大きさの鏡を作ります。図1。その表面はなるべく薄いメタルミラーを使います。メタルミラーをカードの裏面に貼ったシェルカードを作ります。シェルカードをデッキの中に入れておきます。



* 方法 *

相手に選ばせたカードをシェルカードの上に位置するようにして、シェルカードをボトムにコントロールします。相手のカードはボトムから2枚目にきます。

デッキを鏡の上に位置させ、鏡に映るカードを相手に見させます。カードを上下させて、映るカードの像が大きくなったり小さくなったりするのを見せます。そのとき見えているのは、メタルミラーが貼ってあるカードの表面です。シェルカードを密かに鏡の中に置いて、デッキをどけます。

デッキをぐるぐるまわすなどの魔法の動作をかけたあと、デッキを鏡の上に位置させて、鏡に映るカードが相手のカードに変化しているのを見せます。そしてボトムカードを見せます。

スプレッドの中の変身

= 加藤英夫、“カードマジックショーアップ講座”、2004年3月2日 =

* 方法 *

1枚のカードを選んでおぼえてもらい、デッキに返してもらったら、何らかの方法でトップにコントロールします。トップの2枚をダブルターンオーバーして、「これがあなたのカードですね」と言います。相手は否定します。

「失敗は成功のもとといいます」と言っ、表向きの2枚をデッキ中央に入れますが、プッシュインチェンジを行って、選ばれたカードを中に押し込んでしまいます。そのあと左手を返して、アップジョグされている1枚の裏表を見せます。

アップジョグカードを押し込みますが、サイドジョグさせます。続けてデッキをリボンスプレッドします。選ばれたカードが表向きに現れます。

スペキュタラーリバーズ

= ベン・ブラウデ、雑誌“MUM” 1953年6月 =

これ自体は変化現象ではなく、出現現象ですが、このやり方を讀んだために、'スプレッドの中の変身'の異なるやり方を思いついたので、先に説明しておきます。

* 方法 *

相手のカードを何らかの方法でボトムにリバーズします。それからデッキをカットして間にブレイクを作り、サイドスチールの要領で相手のカードを右にジョグさせて、デッキをリボンスプレッドします。ジョグされた相手のカードは隠れています。

ここでスプレッドをターンオーバーするのです。そうすると全体は表向きになり、中央に1枚の裏向きのカードが現れます。相手のカードを名乗らせてから、そのカードを表向きにします。

スプレッドの中の変身 V2

= 加藤英夫、2012年6月1日 =

なんという奇遇なのでしょう。前述の'スプレッドの中の変身'と'スペキュタラーリバーズ'を続けて讀んだために、両者をミックスしたようなトリックを思いつきました。一発でうまくいきました。試してうまくいったときの感動、これこそカードマジック創作の驚きであり、喜びであるのです。

* 方法 *

選ばれたカードをトップにコントロールします。ダブルターンオーバーして、「あなたのカードですか」とたずねます。相手は否定します。「失敗は成功のもとといえますから、このカードを使います」と言って、表向きでダブルのまま取り、デッキ前エンドから中央に入れますが、ファローシャフルのように間に1枚はさまるような入れ方をします。

デッキの左上コーナーに、2枚をなるべく右親指に近い位置を押し当てて入れるようにすれば、図1、うまく間に1枚はさむことができます。そのとき、左親指はデッキをしっかりと押さえていることが重要です。しっかりと押さえていないと、2枚以上はさまることがあります。



2枚を中に押し込むとき、右下コーナーが右に出るような押し込み方をして、押し込んだ下のカー

ドの下にブレークを作ります。そしてカードをそろえる動作で、ブレークの上のカードをサイドジョグします。右に突き出た部分は右手でカバーしています。

デッキを裏向きにリボン Spredd しします。中央に先ほど見せた表向きのカードが見えています。Spredd の左端を右に倒し、Spredd を表向きに戻します。表向きの中に 1 枚の裏向きのカードがあります。それに対し魔法をかけ、相手のカードを名乗らせてから、そのカードを抜き出して表向きにします。相手のカードです。

スナップオーバーエーセス

= エディ・フェクター、雑誌「プリカーサー」、1991 年 10 月 =

以下の前書の文章は、この作品を解説した、ウィリアム・ミーゼルの文章の翻訳です。

「このトリックはもう見せたかな」という言葉は、私たちがエディ・フェクター経営のフォクスホテルを訪れたときの、エディの出迎えの決まり文句です。このセリフでせきが切れたかのように、マジックのやりとりが始まるのです。

これから紹介するのも、「このトリックはもう見せたかな」に属するマジックのひとつです。以下のやり方だけでは、マジックとして完結されていないことを、エディ自身も認めていましたし、何らかの手順の一部としてまとめられるべきだと言っていました。エディはその思いを達成することなく、私たちのもとから去っていきました。しかしこのビジュアルなチェンジ技法によって、エディはいつもマジシャンたちを煙に巻いていました。

* 方法 *

デッキのトップから 2 枚の赤の A、2 枚の黒の A、とセットしておきます。デッキをテーブルに横向きに置きます。左右の手をデッキの左右に置きますが、親指を手前、人さし指をトップカードの上、他の指を外側のコーナーに当てます。

左親指で密かに 1 枚ずつ計 3 枚のカードをリフトし、3 枚目の下に右親指でブレークを保持します。右人さし指を手前にずらして、親指とともにブレークの上の 3 枚をしっかりとさみみます。

左親指は左内側のコーナーであと 1 枚のカードをリフトし、上の 3 枚や下のデッキとは分離させます。以下の動きはひとつの流れの中で行います。右の中指などでおさえている部分を離し、親指と人さし指で 3 枚を 1 枚のごとく前方に戻して表向きにし、すぐに続けて左の指で 1 枚を弾きながら手を返し、両方のカードが黒いカードであることを見せます。

左の 1 枚を先にデッキのトップに裏向きに戻し、すぐに続けて右手のカードを裏向きにしてその上に重ねます。

「ところであなたのカードは何でしたか」と2人の客にたずねながら、デッキを左にねじりながら右手で図2のようにつかみます。ブレークを右親指で継承します。ブレークを継承したからといって、左手の親指をデッキの側面から離すと、ブレークが前エンドで浮いてしまうので、左親指はデッキの側面に当てたままにしておきます。



図2の状態から、デッキをテーブルの上に運びながら、左手を左上にねじるようにして、図3の状態デッキをテーブルに置きます。



左親指で押さえているのをゆるめ、4枚目の下のブレークを左親指で継承します。同時に右親指は3枚を弾き落とし、トップ1枚の下にブレークを作るようにします。図4。



続けて左手の3枚と、右手の1枚を図5のように左右に少しずらします。



そして両方の中指でカードを弾き、手前に返して表返しますが、その途中で右手のカードを上にして、図6のようにして静止させます。



右手のカードが図の位置にあることにより、そこで静止して間をとっても、カードの厚さが見えません。表返したら、「まだものままです」と言います。両手を手前に返して、左右のカードを同時に裏返してデッキの上ののせてそろえます。

フェクターは1回目の返しと2回目の返しの間に手を離しません、私は手を離して魔法をかけた方がよいと思います。

魔法をかけたあと、まえと同じように左右の手をデッキの左右のエンドにかけ、まず右手で1枚リフトし、つぎに左手でつぎの1枚をリフトします。もしも右手がリフトしたときに2枚上がってしまったら、そのことは感触でわかりますから、1枚を落として左親指で受け止めるようにします。

1回目と同じように見えるように、2枚同時のスナップオーバーを行い、2枚の選ばれたカードを現します。図7。



図7の状態です少し静止させたら、2枚を前に投げて、「お2人のカードです」と言って終わります。

アライズコムレイド

= エリック・メイソン、雑誌“パピュラーファイル”、1975年6月 =

このあと解説する‘ライザーチェンジ’に、フレッド・ロビンソンの‘アンビシャスライザー’を使いますので、その技法のやりやすいバリエーションを解説しておきます。

* 方法 *

ロビンソンの原案では、ライズさせるカードをサイドジョグした状態からスタートするため、マジシャンから見て右の観客からのアングルに弱い欠点があります。図1。(緑色がはみ出ている部分です。誇張しています。実際はこれほど突き出しません)。



メイソンのバリエーションでは、ライズさせるカードをサイドジョグではなく、少しダウンジョグさせます。その状態でロビンソンの原案のようにデッキを左手に持ち、インジョグカードの右下を小指で押して、けっきょく原案のサイドジョグの位置にずらし、そこからライズさせるのです。

* 方法 *

ライズさせるカードを7、8mm ダウンジョグさせて、デッキを図2のように持ちます。親指と人さし指で可能なかぎりデッキ上端ぎりぎりを持つようにします。



そして体を斜め右に向けて、デッキの表面を観客に向けてかまえるとき、図3のように左小指をジョグカードの右下コーナーの下に当て、右手で魔法をかけるとか、左手でデッキを振るまでの魔法をかけたとき、



図4のように右下コーナーを右上に上げて、



続けて小指を思い切り上げて、そして薬指を押すことによって、押し上げたカードを垂直にします。図5。



ライザーチェンジ

= 加藤英夫、2002年11月2日 =

* 方法 *

選ばれたカードをボトムにコントロールしてから、カットもしくはヒンズーシャフルでトップから12、3枚目に運び、そのカードの下にブレイクを作ります。「このようにカードを広げていきますから」と言って、両手の間にカードを広げていき、ブレイク上の選ばれたカードをスライドアウトします。それには、ブレイク上の2枚目の裏に左親指を当てて、左中指で選ばれたカードを右に押し出すのです。

「適当な1枚を指さしてください」とセリフを続けます。そして指さされたカードの右でカードを分け、図1のように右手のカードを下げて、指さされたカードの右下をつかみますが、選ばれたカードをそのカードの下にすべり込ませます。



右手のカードを左手のカードの高さまで上げながら、右指先を曲げて、選ばれたカードを少し下にずらします。図2。



そしてカードを閉じて、図3のようにそろえます。指さされたカードはカードの長さの3分の1ぐらい、ダウンジョグカードは8mm程度突き出させます。



「あなたが選んだカードは何でしたか」とたずねてから、「これはあなたのカードではありません」と言って、アップジョグされているカードを見せます。

デッキを'アライズコムレイド'のできる位置に持ち、右手で魔法をかけるか、左手でデッキを振りながら、選ばれたカードを一気に押し上げ、カードの変化を見せます。2枚を1枚として抜き出し、表向きにデッキの上に置き、「はい、あなたのカードになりました」と言って終わります。

3 度目のアブラカダブラ

= 加藤英夫、2004 年 1 月 17 日 =

* 方法 *

このトリックには、デュプリケートカードが 1 組必要です。スペードの K を使うこととします。それら 2 枚をデッキのトップにセットしておきます。

最初にトップ 2 枚が保たれるシャフルをやつてもかまいません。デッキを両手の間に広げますが、最初のデュプリケート 2 枚を右親指のつけ根ではさんで広げていきます。そして中央部分を広く広げて、「このあたりからどれでも 1 枚抜いてください」と言って、1 枚抜かせます。

左手のカードを右手のカードの上ののせてそろえますが、つけ根ではさんでいるデュプリケート 2 枚の下にブレイクを作ります。

デッキを両手の間に広げ、ブレイクの下で分け、左手のカードの上に相手のカードを返してもらい、右手のカードをのせてそろえますが、デュプリケート 2 枚の上にブレイクを作ります。そしてブレイクでダブルカットして、そのあとトップ 3 枚が保たれるシャフルを行います。トップからデュプリケート 2 枚、選ばれたカードとなっています。

「私も 1 枚のカードを選んでおぼえます」と言って、デッキの中から適当な 1 枚を抜いて、見ておぼえる演技をしますが、おぼえる必要ありません。そのカードをデッキ適当な位置に入れます。

「適当な 7 枚のカードを使います」と言って、デッキを両手の間に広げていきますが、最初の 3 枚を右親指のつけ根ではさんで広げていきます。そして適当なカードを 7 枚アップジョグさせます。あまりこの部分に時間をかけたくないなので、数枚ずつアップジョグしてもかまいません。アップジョグしてからカードをそろえるとき、トップ 3 枚の下にブレイクを作ります。

アップジョグしたカードを表向きにしてトップにのせ、ブレイク上の 10 枚をビドルポジションに取ります。「お見せする中にあなたのカードがあるかどうか見ていてください」と言って、ブラウエアドオンを行います。デッキより 2cm ぐらい前に返して置いていきます。

5 枚目を裏返したとき、そのカードの下にブレイクを作ります。図 1。



そして6枚目を返したら、残りのカードを返したカードの上に置き、最後の1枚を裏返します。

いま10枚のカードが前にずれています、上の6枚の下にブレイクがあります。右手を上からかけて前にずれているカードをつかみますが、ブレイクより上のカードをつかみ、それより下の4枚は左人さし指で押してデッキにそろえてしまいます。右手の6枚を裏向きで相手に渡します。「この7枚を持っていてください」と言います。

「私も7枚のカードを使います」と言って、適当なところから7枚のカードを取り、残りのデッキはわきに置きます。7枚の表を自分に向けて広げ、ながめ渡してから、「この中に私のおぼえたカードはありません」と言います。そのとき、トップ(バック)から2枚目のカードをグリプスして記憶します。あとでそれが自分の選んだカードと告げるのです。7枚をそろえて裏向きに左手に持ちます。

「魔法の言葉に“アブラカダブラ”というのがありますが、その言葉に合わせてカードをいちばん上からいちばん下にまわしていただきます。私といっしょにやりましょう。では、ア、ブ、ラ、カ、ダ、ブ、ラ」と言いながら、1文字につき1枚上から下にまわします。相手にもいっしょにやってもらいます。

お互いに7枚まわしたら、トップカードを表向きにします。「私のはハートの7ですが、あなたのはスペードのKですね。裏向きに戻しましょう」と言って、お互いに裏向きに戻します。

お互いにもういちどアブラカダブラでカードをまわします。そしてトップカードを表向きにすりど、先ほどと同じカードが現れます。またそのカードを裏向きに戻すとき、あなたはトップから2枚目の下にブレイクを作ります。

「じつは魔法の言葉にも、三度目の正直というのがあるのです。ですから、もういちどやると不思議なことが起こります。やりましょう」と言って、同じようにまわしますが、あなたはブレイク上の2枚を1枚目としてまわします。あとの6枚はふつうにまわします。そうすると、あなたのポケットのトップには、先ほどグリプスしたカードがきています。

「さて、私の選んだカードは〇〇の××でした」と、グリプスしたカードの名前を言います。そしてトップカードを表向きにします。「ほら私のカードです」と言います。

「あなたの選んだのは何のカードでしたか」とたずね、相手のポケットのトップカードを表向きにさせます。選ばれたカードです。

あなたの手の中で

= 加藤英夫、2000年6月21日 =

これは私の作品の中でも、驚きの大きさの点では、最高度のものかもしれません。何と云っても、マジシャンがカードに触れず、相手の手の中でカードが変化するのですから。私はこの作品で使われる技法を、'スペクテイターズダブルリフト'と名づけました。

* 現象 *

相手が選んだカードがデッキに戻され、よくシャフルされたあと、マジシャンは4枚のカードを相手に渡します。

相手は4枚を表向きに右手に持ち、4枚を左手に1枚ずつ取り、その中に選ばれたカードがないことを確認します。

つぎに相手は4枚を裏向きに持ち、ゆっくりと1枚ずつ左手に取っていきます。3枚取ったところで、右手を返して4枚目の表を上に向けて、そのカードが何であるかを確認します。選ばれたカードではありません。相手はそのカードを左手のカードの上に置きます。

相手が左手の4枚の上に魔法をかけます。それからトップカードを表向きにすると、それは選ばれたカードに変化しています。

いかがですか。現象説明を読んで驚きませんでしたか。間違いなくその通りのことが起こるのです。

* 方法 *

相手に1枚のカードを選ばせ、おぼえてもらい、返してもらったらトップにコントロールします。

「4枚のカードを使います」と言って、トップから4枚順が変わらないように取り、密かに下に1枚アクションして、5枚を相手に渡します。「説明のために私も4枚取ります」と言って、4枚取り、残りのデッキはわきに置きます。

「このように表向きに持ってください」と言って、お互いに表向きにビドルポジションに持ちますが、相手にきちんとビドルポジションに持たせることが重要です。親指と中指は上下のエンド中央、そして薬指もエンドにかかっている、小指はかかっていない状態です。

「このように左手の親指を上にかけて」と言って、左手の指を伸ばして、左親指をフェースカードの中央にかけ、左に引いて取ります。相手にもやらせます。たいていの場合うまくいきますが、相手がうまくできない場合は、カードを戻させて、この段階でうまくいくように指導します。

あなたといっしょに、相手に2枚目、3枚目と取らせると、右手にダブルの2枚が残ります。「4枚目もそのままのせてください」と、あなたの手本を見せながら言います。

「その中にあなたが選んだカードはありましたか」とたずねます。相手は否定します。

「ではこんどは裏向きでやります」と言って、お互いにパケットを裏向きにして、3枚目まで取るのをいっしょにやります。3枚目まで取ったら、「このように手を返して、最後のカードを見てください」と、右手を返してカードの表を上に向け、相手にもそのようにやらせます。

「裏向きに戻して置いてください」と言って、裏向きに戻して左手のカードの上に置かせます。

相手のパケットのトップカードを指さし、「それはあなたが選んだカードでしたか」とたずねます。相手は否定します。

「ではそのカードに魔法をかけてください」と指示します。それから相手の選んだカードを名乗らせ、「ではそのカードを表向きにしてください」とし言います。それは選ばれたカードに変化しています。

* 備 考 *

上記の解説では、トップから4枚順が変わらないように取り、密かに下に1枚アデクションして、5枚を相手に渡します、と書きましたが、そのやり方について、私の技 'HK アデクション' を説明いたします。

1枚、2枚、3枚と取り、3枚目を押し出すときに4枚目と5枚目をほんの少し押し出し、3枚目を取ったときに4枚目と5枚目を戻してそろえ、下にブレークを作ります。そしてその2枚を4枚目として取ります。そして5枚をそろえて右手に持ちます。

Part 2 特別なカードへの変化現象

イリュージョンインレッド&ブラック

= エアハード・リーバナウ、“コンセルトスフォーペイストボード”、1995年 =

* 準備 *

9のカード4枚、6のカード4枚、ハートの8とスペードの8を使います。それらを赤と黒に分けて、同じ色の5枚を混ぜ、5枚ずつを重ねます。

* 方法 *

テーブルに裏向きに5枚ずつ2列に並べます。一方の列に黒、他方の列に赤のカードが並びますが、どちらがどちらに置かれてもかまいません。

相手に1枚のカードを選ばせ、わきに置かせます。先にカードが選ばれなかった方の列を集め、その上に残りの4枚を重ねます。

9枚を表向きにビルドポジションに持ち、ハマンカウントによって、すべて同じ色の9枚のカードに見せます。相手の選んだカードを表向きにして、相手が1枚だけ違う色のカードを選んだことを示します。

そのとき、表向きに持っている9枚のうち、フェースカードの下にブレイクを作ります。右手で相手の選んだカードを表向きに左手のポケットにのせ、ブレイクの上の2枚を取り、左手の8枚を裏向きにして、右手の2枚を裏向きにのせます。すぐに上の1枚をプッシュしてテーブルに置きます。

つぎのようにしてふたたび手元の9枚が同じ色であることを見せます。

9枚を裏向きに持っています。上から2枚をプッシュして広げて右手に取り、つぎはボトムカード以外すべてをバックルして押し出し、右手のカードの下に取り、右手のカードをそろえながら左手の1枚の上に表向きに戻します。これは、3枚取って表向きにしたという動作です。そして上の2枚をプッシュして3枚の同色のカードを見せ、ふたたび3枚目以降をバックルして右手の2枚の下に取り、右手でそれら全部を裏向きに戻します。上から3枚のカードをテーブルに1枚ずつディーリングします。

もういちど同じことを行って、つぎの3枚を同色に見せ、先にテーブルに置いたカードの上に1枚ずつ裏向きに置きます。残りの3枚の表を見せ、先に置いたカードの上に1枚ずつ裏向きに置き

ます。

テーブルから9枚を取り上げ、表向きにしてハマンカウントを行います。9枚が反対の色に変わったように見えます。わきに置いてある1枚を表向きにして、それだけ違う色であることを見せます。

* 備 考 *

このマジックの前半は、雑誌“Magick”No.112(1974年)に紹介された、ディック・マデンの‘10-to1 Shot’そのものであり、3枚ずつ見せるフォールスディスプレイは、“スーパーマジック”(1977)に掲載された、J.C.ワグナーの‘オネストジョンズエースアセンブリー’に使われている手法であるとのことでした。

原著では、上記のように全体的なセリフも書かれていませんし、現象に対するストーリーづけもされていません。そのような解説を読むと、構成は面白いとしても、実際に演ずる気持ちを触発されにくいものです。私はつぎのような演出を考えました。

まず、相手がカードを選ぶまえに、「1枚のカードを選んでいただきますが、きっとあなたは特別なカードを選ぶことになりますよ」と言っておきます。

ハマンカウントで9枚を同じ色に見せて、選んだカードだけ違う色であるのを見せ、ダブルリフトしてすり替えてテーブルに置いたあと、(相手の選んだのが赤だとして)「なぜあなたが赤を選んだかということ」と言いながら、裏向きに持っている9枚を広げ、中央の1枚(赤)をアップジョグして、「たとえばこのカードを選んだとしてもですね」と言いつつ、アップジョグカードの下で分けて、右手のカードを左手のカードの下に入れます。

そしてアップジョグカードを抜いて表を見せ、「やはり赤なんです」と言って、そのカードをポケットのボトムに入れます。「すなわち」と言って、9枚を表向きにして、ハマンカウントで全部赤であるのを見せます。

「でも私にわからないのは、どうしてあなたが違う色のカードを選んだのかです」と言って、テーブルに置いてあるカードを表向きにして、それが違う色になっているのを見せます。

J.C.ワグナーの技法を省きました。その方が、演技の流れがスムーズになるからです。

アイダウトイット

=ビル・サイモン、“スライトリーセンセーショナル”、1954年=

* 準備 *

トップに2枚の黒い2のカードをセットしますが、2枚目は表向きに置きます。

* 方法 *

セットした2を見せないようにデッキを表向きに広げ、2枚のQを抜き出してテーブルにフェースツーフェースに重ねて置きます。すなわち1枚目を表向きに置いて、2枚目をその上に裏向きに置くのです。「マジシャンの最強の武器は、存在しないものを相手に見えるようにするという秘密のテクニックです。その実例をお見せしましょう」と言って、上のQを右に半分ずらして下のQが見えるようにします。

「ここにあるQは現実に存在しています」と言って、相手がそちらの方を見ているときに、トップから2枚目の下にブレイクを作ります。裏向きのQの表を見せて「これも現実に存在するQです」と言い、そのQを表向きのQの上に裏向きにのせ、2枚を取ってデッキのトップにのせます。

続けてブレイクから上の4枚をひっくり返し、上の3枚を1枚のごとく右にずらして表向きのQを見せます。カードをそろえますが、4枚の下にブレイクを維持します。「上から指で押してやります」と言って、右手の指でトップカードを押して魔法をかけます。そして上から2枚のカードを取ってテーブルに置き、すぐに上の裏向きのカードを右にずらします。

表向きの2を右手で取って、デッキのトップに置き、「これが2のカードに見えていればあなたは正常です」と言います。右手でテーブル上で裏向きのカードを表向きに返し、「これも2のカードに見えるはずです」と言います。[改善ポイント]

ブレイクから上の3枚をひっくり返し、すぐに上の2枚を右手に取り、左手はデッキをテーブルに置きます。続いて左手でテーブル上の表向きの2を取り、右手の2枚をその上にのせてそろえます。

「でもいま見えていたのは、あくまでもそのように見ただけであり、現実は違います」と言って、上の1枚をプッシュし、それを表向きにしながら右手に取り、2枚のQを見せます。

3枚をそろえて裏向きにしてトップにのせれば、余分なカードを処理できます。

* 備考 *

[改善ポイント]以降をつぎのようにやった方がよいと思います。最後にデッキを置いて、手

元で3枚を2枚のように見せ、それからまたそれらをデッキの上に置いて処理する、というのを疑問に感じるからです。それほど重要な違いではないかも知れませんが、そういう考え方もある、という程度で読んでください。

ブレイクから3枚をひっくり返し、すぐに上の2枚を右手に取り、その2枚をテーブルの表向きの2の上に重ね、それらを取り上げてデッキのトップに置きますが、3枚の下にブレイクを保ちます。

魔法をかけるなどしたあと、上の裏向きの1枚をずらして、下のカードがQに変わっているのを見せます。そして裏向きのカードを表向きに返し、それもQに変わっているのを見せます。2枚のQを広げたまま、その下の1枚とともにデッキの上に裏返してのせて終わります。

この作品に見られる、デッキのトップにフェーストウフェースにある2枚と、その上にのせた別のフェーストウフェースの2枚をすり替えるという手法は、のちに多くの作品に見られますが、この作品が原点であるようです。

フラッシュョック

=ピーター・ダフィ、雑誌“マジック”、1997年10月=

* 準備 *

ボトムより、AS、KS、X、QS、JS、10Sのロイヤルフラッシュをセットします。

* 方法 *

ボトムストックを乱さないようにシャフルしたのち、デッキを左手に持ち、相手の方にさし出して、まん中へんからカットさせます。相手に上半分をシャフルさせ、あなたは下半分をボトムをくずさないにシャフルします。

シャフルしたのちに何回かカットするように指示しますが、手本を見せるときにボトムの2枚をトップにアンダーカットします。そしてトップの3枚目の下にブレイクを作ります。相手にトップカードを表向きにさせます。あなたはブレイクからトリプルリフトして3枚を表向きにトップに戻します。3枚の下にブレイクを作ります。

2人のカードは当然ながら、ランダムなカードであることを述べます。相手のカードを取って表向きにあなたのカードの上にのせ、ブレイクからひっくり返します。そして上の2枚をテーブルに置きます。

ふたたびお互いにシャフルしますが、あなたはボトムの3枚をくずさないように行います。そしてカットしてボトムの3枚をトップに運び、それらの下にブレイクを作ります。まえと同じことを行って、2枚のカードをすり替えてテーブルのカードにのせます。

相手のカードを受け取って手元のカードに重ねます。スペードの10がボトムにあります。スペードの10をフォースしますが、ダフィはヒンズーシャフルフォースを使っています。ヒンズーシャフルしていき、ストップがかかったところで、右手のボトムカードを抜き出すのです。そのカードでテーブルのカードに魔法をかけ、表向きにしてロイヤルフラッシュを現します。

双子を見つけろ

= 加藤英夫、1999年3月7日 =

* 方法 *

シャフルされたカードを、表を上にして広げ、「1組のカードの中には、不思議なパワーを持った双子のカードが入っています。そのうちの1枚を使います」と言って、表を自分に向けて広げていきますが、トップカードをグリップスして、それと同色同数のカードを抜いて、トップに置きます。

デッキを裏返しますが、そのときトップから3枚目の下にブレークを作ります。そしてトリプルターンオーバーを行います。現れたのがクラブの8だとしましょう。トップの2枚は赤の2だとします。「双子のカードというのは、同じ色で同じ数のカードが双子ですから、クラブの8の相手はスペードの8です。これから見せるマジックは、よくシャフルされたカードの中で、双子のカードがそろってしまうというものです」と言って、3枚を裏向きに戻し、3枚をデッキの前端から中央あたりに入れます。そしてマルローのスウィヴルチェンジを行います。すなわち、さし込んだ3枚のうち、いちばん上の1枚を左に傾けつつ、下の2枚をデッキの中に入れてしまうのです。

「このカードはクラブの8です」と言って、突き出ているカードを指さして言います。カードに魔法をかけます。「このように魔法をかけると、ここからスペードの8が出てきます」と言って、突き出ているカードの上でカードをカットして、右手を返してそのパケットのボトムカードの表を見せます。図1。



それはスペードの8ではありません。違っていることに驚いた表情を見せます。そのとき左親指で左手のトップカードを少しずらして戻し、その下にブレークを作ります。

右手のカードを左手のカードの上に戻します。そうすると図2の状態となり、ブレークの上のカードは斜めにジョグされているカードと同色同数のカードです。



「このような場合には、魔法でカードを変化させます」と言って、カードに魔法をかけます。右手でカードをカットしますが、ブレイク上のカードを右に引いて分けます。そして右手のポケットを表向きにします。黒い2のカードが現れます。困った表情をしながら、そのポケットを表向きにテーブルに置きます。

「このような場合には、こちらのカードに魔法をかけます」と言って、左手の斜めになっているカードに魔法をかけてから、そのカードを右手で取って表向きにします。「これでようやく双子がそろいました」と言います。

ザ・変身

= 加藤英夫、2000年11月16日 =

* 方法 *

相手にデッキを渡してよくシャフルさせます。シャフルされたデッキを受け取り、「同じ数のカードを4枚使うマジックがありますが、たいていの場合4枚のAを使います。今日は使うカードをお客様に指定していただけます。好きな数を言ってください」としゃべり、1人の客にAからKの中から任意の数を指定させます。

相手がAを指定したとします。「それでは、Aそのものではなく、Aに変身しやすいカードを4枚抜き出しましょう」と言って、表を自分に向けてカードを広げていきますが、フェースのすぐ近くにAがある場合は、1回カットしてから広げ直します。6、7枚目に指定された数のカードがあってはやりにくいのです。広げ始めるときにフェースの4枚の右上コーナーを右親指と人さし指のつけ根でクリップして広げ続けます。そして4枚のAをアップジョグします。

4枚のAをアップジョグしたままカードを閉じますが、右親指でクリップしている4枚の後ろにブレイクを作りながらそろえます。図1はマジシャンの右サイドから見たところです。



アップジョグされた4枚を右手で抜いて、いったん図2のようにデッキのフェースに置きますが、図に示された程度にアップジョグさせて置きます。この動作に合わせて、「この4枚はとても不思議なカードです」などと言います。



図2の位置に右手をかけたとき、左中指で押すことによって、ブレークの割れ目を大きくして、右手の指先を図3のように割れ目にさし入れます。



そして図4のようにアップジョグカードを下げつつ、右手でフェースの8枚のカードをつかみ、右手は手前に返してカードを裏向きにし、左手は向こうに倒してデッキの表を上に向けます。



そして「この4枚を逆向きにします」と言いながら、右手のカードをデッキのフェースにのせます。図5。



いま裏向きにのせた8枚は、上の4枚と下の4枚が少しずれていますから、カードをそろえつつ、下の4枚はデッキのフェースにそろえ、上の4枚の手前エンドを右親指で浮かせます。図6。下のカードの裏面を露見させてはいけません。



右手で4枚を保持したまま、左手はデッキをパドルリバーします。この技法については、備考を読んでください。その技法は、デッキを180度回転させて置いたと見せて、360度回転させてしまうというものです。その結果、テーブルに置かれたデッキの状態は、全体が表向きであるが、上にある4枚が裏向きの7のカードとなります。

実際は、左手がパドルリバーを行うとき、同時に右手は4枚を表向きに戻してテーブルに置きます。マジシャンの視線は右手のカードの方に向けて行き、右手のカードを表向きに置いたら、

すぐに4枚をスプレッドします。そして「4枚のカードはバラバラのカードです」と言います。

表向きの4枚をそろえ、左に置いてあるデッキを取り上げ、4枚の表向きのカードの上に重ね、全体を取り上げます。「4枚のカードは他のカードと逆向きになっています」と言いながら、デッキを左手の上で縦に返し、右手でいちばん上のカードを指さします。

ここでふたたびパドルリバーズを行い、デッキを右手のビドルポジションに渡します。そしてすぐに右手は上半分をスウィヴルして左手に渡し、残りの半分をその上にのせてそろえます。これでデッキの中央に4枚の7だけが表向きになっています。デッキをテーブルに置き、魔法をかけてから広くリボンスプレッドし、4枚の7のカードを現します。

*** 備 考 ***

パドルリバーズは、“Card Magic Library”第8巻に解説されていますが、’天海リバーズ’を行ってからリフルシャフルするという流れで行うものです。この作品ではデッキをテーブルに置くときに行うものなので、少しやり方が違います。

デッキの下に左親指を図7のように入れて、



図8のようにデッキを起こして右に返しつつ、



同時に左手の甲が上に向くように左手を返します。図9。
そして左手のポケットをテーブルに置きます。



* 備 考 *

この技法で重要なのは、説明された動作を、デッキをテーブルに置きにいく動きの中で行うということです。そして、デッキを横方向に返す動作はハーフパスの要領で、ほとんど右手がまだデッキにかかっている段階で行うことです。しかしながら、横方向への返しは急いでやっ
てはいけません。

メンタルサブトラクション

= ヘンリー・クリスト、雑誌“リンキングリング”、1943年10月 =

* 方 法 *

シャフルされたデッキで、「3枚のカードを使います」と言って、クラブの10、8、Q、2をトップに置きます。マークは他のマークでもかまいません。

デッキを裏向きに持ち、トップのクラブの10を見せて、「このカードにはマークが10個あります。インデックスの小さいのは数えませんが」と言って、裏向きにしてテーブルに置きます。つぎの8を見せ、「つぎは8ですから、マークの合計は18になります」と言って、裏向きにしてテーブルに置きます。

つぎはダブルリフトで2を見せ、裏向きにして上の1枚をテーブルに置き「2を加えると20個になります」と言います。

「合計20となりました。こんどは引き算をやりましょう」と言って、10のカードを取って表を見せてからトップに戻します。「20-10は10ですね」といいます。8のカードを取って表を見せてからトップに戻し、「10-8はいくつになりますか」と相手に答えさせます。「2」と答えます。「そうです、残りのマークの数は2になります」と言って、Qの表を見せ、2つのマークを指さします。

シンデレラ

= 加藤英夫、1999年5月23日 =

* 現 象 *

マジシャンが数えながらディールして、相手が好きなところでストップをかけます。マジシャンは手元のカードのトップから4枚を広げ、その表を見せてバラバラのカードであることを見せ、もとに戻し、ディールしたカードをその上にのせます。

相手にデッキを渡し、デッキに対して魔法をかけさせます。そして相手にディールさせ、先ほどストップしたのと同じ枚数でストップさせます。手元のトップから4枚のカードを表向きにさせると、それらは4枚のQに変化しています。

* 方法 *

4枚のQをトップにセットしておきます。トップの4枚が保たれるようなシャフルやカットを行います。

トップからカードを声を出してカウントしながらディールしていき、相手にストップをかけさせます。スピーディにディールし、なるべく10枚以上ディールするようにします。

たとえば11枚ディールされたところでストップがかかったとします。「いま11枚のカードを置いたところでストップがかかりました。あなたはどこでもストップをかけられました。ところがここから特別なカードが出てきます」と言って、トップから4枚のカードを広げて取り、右手を返して4枚の表を見せます。



それらはランダムなカードです。「いっけん変哲もないカードに見えますが、じつは特別なカードなのです」と言ってから、それらをトップにそろえつつ、「何が特別なのかあなたにわかりますか」と言いながら、4枚をそろえて右手にパームします。そのセリフは相手の顔を見ながら言います。

左手を少し高く上げ、そちらにあなたの視線を向けながら、「この4枚が特別なのは、じつはシンデレラに出てくる4人の女性だということです」と言って、左手に注目を集めながら、右手をディールされたカードの上にかけて手前に引いて取り、それらを左手のカードの上に重ねます。パームした4枚のカードがトップに加えられました。「これで4枚はもとの枚数目に戻りました」と言います。

「4人の女性を変身させるには、このような魔法をかけます」と言って、デッキに魔法をかけます。そして相手に渡します。

「あなたは先ほど11枚でストップをかけましたので、11枚のカードを置いてください」と言って、先ほどディールされたのと同じ枚数をディールさせます。相手の手にあるカードを指さして、「ではそちらから4枚のカードをください」と言って、4枚のカードをあなたの左手に置かせます。

「シンデレラでは、4人の平凡な女性がきれいなレディに変身しました。うまくいったか見てみましょう」と言って、4枚を表向きにして、4枚のQを現します。

* 備考 *

以上の説明の中で、それらをトップにそろえつつ、「何が特別なのかあなたにわかりますか」と言いながら、4枚をそろえて右手にパームします、と書かれています。この部分は意図的にそのように簡略に書きました。そのようなそれほど重要と思える部分にも、よく考えると重要なポイントがあるからです。その部分をクオリティアップするフィネスについて説明します。

おそらく上記の説明を読んだ方の多くは、広がった4枚をそろえつつデッキの上に置いて、それらの下にブレイクを作るでしょう。それからカードをそろえる振りをしてパームします。

広がった4枚をデッキの上でそろえてはいけないのです。そこでそろえてしまったら、そのあとカードをそろえる動作が浮いてしまいます。

広げた4枚の表を見せて、「いっけん変哲もないカードに見えますが、じつは特別なカードなのです」と言ったあと、いったん4枚を図2のような感じに、デッキの上に右にずらして置きます。



続けて、「何が特別なのかあなたにわかりますか」と言うときは、右手をカードから離して、「あなたに」に合わせて右手で相手の方をさします。図3。



相手は返答につまらに違いありません。「わかるはずないですよ」などと言いながら、右手を左手前に返し、図4、カードをそろえて4枚をパームします。



図2の状態を見せておくことによって、そのあとそろえる動作がナチュラルに見えるのです。

それともうひとつ、広がったカードをデッキの上にそろえ、右手でそろえる動作を続けると、手の平が上を向いていたのを、手の平を下に向けてデッキにかけることになり、手がくるっと返り、しかも同時に右腕もけっこう動きます。鏡に映してやり比べてみてください。

図3から図4のように運べば、右手の動きが小さくなります。しかも都合がよいことに、その動きの流れでパームをやる方が、ずっとスムーズにパームできるのです。

Part 3 その他の変化現象

4枚の'8'を4枚の'2'に変えたり、黒い4枚を赤の4枚に変えるマジック

= プロフェッサー・ホフマン解説、“モダンマジック”、1876年 =

ホフマンは著書のすべての作品に対して、上記のように現象を説明する長いタイトルをつけています。このトリックの場合には、このタイトルがまさにこのトリックの現象をすべて語っています。

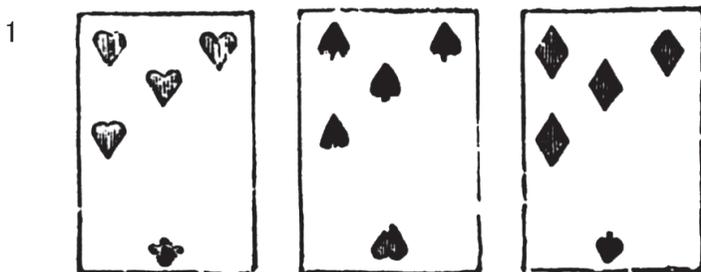
最初に4枚のカードを広げると、4枚の8のカードです。それを広げ直すと、4枚の2に変化しています。さらに閉じて広げると、全部黒いカードになっていて、最後にそれらが全部赤いカードに変化しています。

ホフマン解説における図では、インデックスのないものが使われていますが、これにインデックスが着いたものが、'FAKO デック'の中に含まれていますので、それらを使用して演じることができます。

以下は、ホフマンの解説の翻訳です。

* 方法 *

このマジックには、3枚の仕掛けのあるカードが必要です。裏面はすべて普通のカードの裏面と同じですが、表面は図1のように印刷されています。たいていのマジックショップで購入することができます。

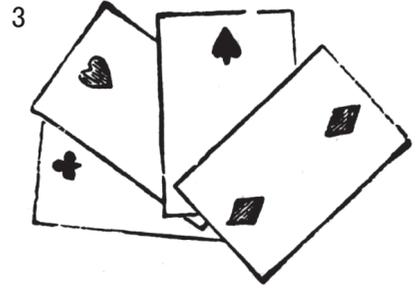


あらかじめこの3枚をデッキのボトムにセットしておきます。'8'のカード4枚とダイヤの2を使うと言ってデッキを取り上げて、4枚の本物の'8'を抜き出し、相手に渡して調べさせます。相手が調べているときに、あなたはボトムの上の3枚の上に左小指をはさみます。4枚の'8'を受け取ってトップに置き、そしてダイヤの2を相手に渡して調べさせているときに、ブレイクから下の3枚をパスによってトップに運びます。

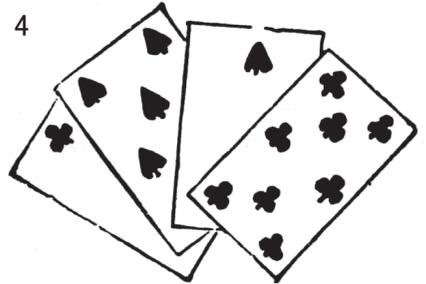
ダイヤの2を受け取ってテーブルに置き、トップから4枚のカードを取り、残りのカードはわきに置きます。4枚を図2のように広げて4枚の'8'を見せます。観客から見れば、それらは調べられた4枚だと思えます。



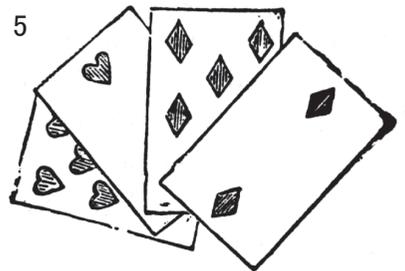
ダイヤの2をクラブの8の下にぴったりさし込んで、クラブの8をテーブルに置きます。ファンをいったん閉じて魔法をかけてから、反対向きに広げます。図3の状態では4枚が'2'に変化したことを見せます。



ふたたびクラブの8をダイヤの2の下に入れて交換し、それからハートの2に見えているカードの向きをひっくり返します。それは「赤いカードを黒い物に触れると、変化が起こります」などと言って、カードで何かに触れてから戻すときに、逆向きに入れればよいのです。図4のように広げた状態で表を見せ、すべてのカードが黒になっているのを示します。



ふたたびクラブの8とダイヤの2を交換します。カード全体を赤い物に触れてから、全体を逆向きにして広げると、4枚が赤いカードに変化したことを見せられます。図5。



連続変化

= 加藤英夫、2003年8月7日 =

前述のホフマン解説の'連続変化カード'のトリックは、最初のうちはよいのですが、あの方でパケットをひっくり返すのが気づかれやすくなります。あの手順どおりに最後まで演ずると、たいていトリックに気づかれてしまいます。そこで同じギャフカードを使って、感じの違うマジックを作りましたので、ここに収録しておきます。

* 準備 *

ボトムにノーマルの8と2を置き、トップに3枚のデバインドカードを同じ数が同じ方を向くように置いておきます。

* 方法 *

裏向きの状態で広げて、「5枚のカードを使います」と言います。いったんカードをそろえ、上から3枚を裏向きのままテーブルにディールし、残りの2枚は表向きにテーブルに置き、「こちらの2枚のどちらかで魔法をかけると、こちらの3枚がそのカードと同じ数になってしまいます。8と2のどちらで魔法をかけましょう」と言って、相手に8か2を指定させます。指定された方を取り上げ、そのカードで3枚をすくい上げ、そろえてからしかるべき向きで広げて、同じ数の4枚になっているのを見せます。

そのあとまた上のカードをテーブルに裏向きのまま置きますが、そのとき2枚目のカードは方向が逆になるように置きます。そしてノーマルな1枚は表向きにして残りの表向きのノーマルカードの隣りに置きます。

2枚の表向きのカードを指さして、「こんどは色で行います。ここには赤のカードと黒のカードがあります。指定されたカードで魔法をかけると、同じ色になってしまいます」と言って、相手にどちらかを指定させます。

指定されたカードで3枚をすくい上げ、しかるべき方向に広げて、4枚が同じ色のカードであることを見せます。

いったんカードを閉じて裏向きに置きます。「このようなマジックを行うと、もしも反対のカードを選んだらどうなっていたらと思う人がいます。ちょっとやってみましょう」と言って、ノーマルカードをさしかえてから、反対の色になったのを見せます。

マジックコピー

= 加藤英夫、考案日不明 =

おそらく以下の説明を読んでも、ほとんどの人がたいしたことないと思うでしょう。でも私は一般の人たちに見せるマジックとして多用している経験から、これが価値あるやり方だと知っています。

テンヨーの商品、'変化カード'を使います。説明書では、ブランクカードをファンに広げたのを見せることから、演技が始まります。そのまえにフラッシュトレーションカウントをやるだけで、ずっとグレードアップするのです。

* 方法 *

「これからお見せするのは、不思議なコピー器の話です。(4枚を裏向きに広げて)、ここに4枚のカードがありますが、裏は印刷されていますが、表はまっ白です」と言って、4枚をフラッシュトレーションカウントで全部ブランクカードのように見せます。カウントしたあと、すぐ全部白く見えるようにファンに広げて、観客にブランクカードであるのが見えるように持ちます。

「これからこの白いカードにコピーするのですが、まずこれでやってみましょう」と言って、Aのカードを見せます。それをファンのフェースにあるカードの上に置き、フェースにあったブランクカードをどけます。

「コピー器が作動します」と言って、ファンを閉じ、ポケットを手で振るなどの動作を行います。

4枚をすべてAのように広げ、「これは不思議なコピー器なので、Aがそれぞれ違うマークのAにコピーされています」と言って、ファンの表を見せます。

「つぎはKをコピーします」と言って、フェースのAとKを交換します。そしてまたコピー器を作動させる動作を行います。この動作中にポケットを逆向きにします。

4枚をすべてKのように広げ、「ほら、それぞれ違うマークのKにコピーされました」と言って、ファンの表を見せます。通常はここで終わってかまいませんが、つぎのように続けてもかまいません。

「白紙に戻すこともできるんです」と言って、表を自分に向けて、フェースのKをどけ、ブランクカードを取って、バックに置きます。そしてポケットを裏向きに持ちます。

トップカードを横向きにターンオーバーしてブランク面を見せ、ターンを続けて裏向きにします。続けてトリプルプッシュオフして3枚をボトムにまわし、トリプルターンオーバーしてブランク面を見せ、続けて裏返します。そしてトップの1枚をテーブルに置きます。

ダブルターンオーバーしてblank面を見せ、裏向きに戻して上の1枚をテーブルのカードの上に置きます。

つぎの1枚をターンオーバーしてblank面を見せ、裏返したら、その動作の続きでボトムディーラーを行い、テーブルのカードの上に置きます。

そして最後の1枚のblank面を見せてから、そのカードでテーブル上のカードをすくい、全部blank面に見えるようにファンにして見せ、「これで不思議なコピー器の話はおしまいです」と言って終わります。

ダブルエンダー

=ピーター・ダフィ、“エフォートレスカードマジック”、1997年=

* 準備 *

青裏のデッキ1組と、赤裏のカード1枚を使用します。説明では赤裏のクラブの4を使うこととします。それをデッキのボトムから13枚目にセットし、青裏のクラブの4は上半分に配置します。

* 方法 *

ボトムの13枚が狂わないようにシャフルしたあと、デッキを表向きにテーブルに置き、あなたは後を向きます。

1人目の客に1時から12時の間の好きな時間を思わせ、カードを取り上げ、思った数だけフェースからバックにまわしてもらいます。何枚まわしたか、2人目の客にわかるようにやってもらいます。

前に向き直ります。デッキを持っている客に、フェースから12枚のカードをオーバーラップさせて一列に並べさせます。そして一方の客に12枚の一端から、他方の客に反対の端から、先ほどまわしたのと同じ枚数を数えて、その枚数目のカードをおぼえてもらいます。

12枚をそろえて、表向きに左手にディーリングポジションに持ちます。2人の客は違うカードを記憶したが、2枚の間に不思議なことが起こる、というようなことを話しながら、12枚のカードをクロンダイクシャフルします。すなわち、フェースとバックのカードを同時に引き抜いて左手に取るということを、すべてのカードがなくなるまで続けます。途中で2人のカードが同時に取られますから、ずれて見えないように注意してください。なるべく手元を見ないでやりましょう。

カードを裏向きにしてテーブルに置きます。ポケットから見えないカードを取り出す演技をして、「このカードはどんなカードにも変身します」と言って、ポケットの中に押し込む演技をします。

ポケットを取り上げて広げ、違う色のカードがあるのを見せます。違う色のカードがトップにくるよ

うにカットします。ダブルリフトして、それがどちらかの客のカードであることを見せます。2枚を裏向きに戻し、上の1枚をテーブルに置きます。

もう1人の客のカードを名乗らせてから、「このカードはどのカードにも変身すると言いました」と言って、それを表向きにします。2人目のカードになっています。

* 備考 *

この作品は、編集初期の時点では収録するに値すると思いましたが、その後いくつかの問題点があり、削除することも考えました。しかしながら、それらの問題点を説明することが、読んで面白いカードマジックと演じて面白いカードマジックのギャップを考察するのに、良い題材だと考え、削除せず、備考においてそれらの問題点を取り上げることにいたしました。

青裏のクラブの4の問題

ダフィの解説の冒頭に、“ボトムの13枚が狂わないようにシャフルしたあと”と書かれていますが、これはシャフルとしては不十分です。上半分に入っている青裏のクラブの4が上半分に保たれる必要があります。それが赤裏のクラブの4の近くにきてしまうと、あとで12枚をテーブルに並べたとき、クラブの4が2枚置かれてしまう可能性があるからです。

上半分にあるクラブの4を上半分に保ち、同時にボトムの13枚をボトムに保つには、どのようにシャフルしたらよいのでしょうか。そのような通常ではないシャフルをしるというのなら、やり方の例を示すのが望ましいと思います。つぎのようにやればできます。

クラブの4はトップにセットしておきます。オーバーハンドシャフルでトップの1枚をランしてスタートし、ボトム13枚より少し手前まできたら1枚インジョグし、残りをまとめて置きます。つぎはインジョグの上でブレイクして、ブレイクより上をまとめて取り、そのあとはふつうにシャフルします。

とこのように考えたものの、そのような考えは、机の前で考えているときの考えです。実際にレクチャーもしくはショーで演じる練習をするときには、そんなことは考えません。どうせセットが必要なマジックですから、青裏のクラブの4は最初から取り除いておけば、シャフルで心配することはないのです。

カードをまわさせるという行為の問題

ダフィはつぎのように書いています。

1人目の客に1時から12時の間の好きな時間を思わせ、カードを取り上げ、思った数だけフェースからバックにまわしてもらいます。何枚まわしたか、2人目の客にわかるようにやってもらいます。

この部分のやり方が、このトリックが数理的トリック的雰囲気醸し出す要因のひとつとなっていると思います。そのような雰囲気を少しでも低減させるには、相手にやらせる行為、もしくはマジシャンが行う行為に対して、明確な理由づけをすることがうまく働く場合があります。私はつぎのようにやります。

デッキを表向きに持って言います。「aさんは、1 から 12 の間の好きな数を心の中で思ってください。思いましたか。では、aさんの思った数が私にわからないようにbさんに伝えていただくために、つぎのようにやってください。私が後ろを向いたら、このようにカードを1枚ずつ下にまわして行って、思った数だけまわしたらストップしてください」と言いますが、このセリフの最後の部分はフェースからバックにまわす手真似をしながら言います。

「bさんはまわされた枚数によって、aさんの思った数がわかるわけです」とセリフを続けます。aさんに表向きのポケットを渡し、後向きになり、説明したことをやってもらいます。

客にカードを表向きに並べさせるとき、マジシャンが見ている問題

ダフィは、前に向き直ってから客にカードを並べさせています。それをマジシャンが見ていれば、クラブの4がどこにあるかによって、客が何枚バックにまわしたかわかります。マジシャンでない人たちには気づかれそうにないことなので、致命的なことではありません。

しかしながら、その時点でクラブの4の位置を知る必要はないので、客の操作を見ないで演じた方がベターです。かと言って後向きで12枚のカードをオーバーラップさせて並べさせるのを説明するのは、けっこう難しいことです。前を向いていれば、カードの置き方を指さして示すことができます。後向きで説明するとしたら、「1枚目を置いたら、2枚目は右にずらして置いてください」と説明するのでしょうか。私はそんなことはやりません。つぎのようにやればよいのです。

演技の最初の方でつぎのように説明しておきます。「私があとでカードをあなたに渡して、“12枚のカードをテーブルに並べて置いてください”と言ったら、このように1枚ずつオーバーラップさせて12枚を置いてください」と、実際にフェースから5、6枚をオーバーラップさせて並べながら言うのです。置いたカードをフェースに戻せば、セットはくずれていません。

原案の説明ではできないケースがある問題

これは、カードマジックの解説としては致命的なミスと言わざるを得ません。ダフィは1人目の客が6以下の数を思った場合のケースについて言及していません。6以下の数が思われた場合は、2人目のおぼえたカードが1人目のおぼえたカードの上に位置してしまい、赤裏カードがトップにくるようにカットしたら、2人目のカードはボトムにいつてしまうのです。以上のようなことを踏まえた上で、つぎに私がまとめたバリエーションを解説いたします。

魔法のカード

= 加藤英夫、2012年10月17日 =

* 方法 *

実際の演技では、相手にある操作をやらせて、相手がそれを終わったことを確認してから続けるわけですが、以下の説明では、そのようなセリフは省いていますので、ご自分で挿入してください。

赤裏のクラブの4をボトムから16枚目に位置させておきます。青裏のクラブの4をデッキに入れておきたければ、前述のようなシャフルで対応してください。

デッキを表向きに持ち、aさんに向かって言います。「私があとでカードをあなたに渡して、“12枚のカードをテーブルに並べて置いてください”と言ったら、このように1枚ずつオーバーラップさせて12枚を置いてください」と、実際にフェースから5、6枚そのように置いて説明します。置いたカードをデッキのフェースに戻します。

「aさんは1から12の間の好きな数を心の中で思ってください。思いましたか。では、aさんの思った数が私にわからないようにbさんに伝えていただくために、つぎのようにやってください。私が後ろを向いたら、このようにカードを1枚ずつ下にまわして行って、思った数だけまわしたらストップしてください」と言いますが、フェースからバックへ3枚のカードをまわしながら説明します。

デッキをaさんに渡して後向きになります。「では思った数だけ上からしたにまわしてください」と言います。しばらくしたら、「bさんは何枚まわしたかわかりましたね」と念を押します。

「それではaさん、最初に説明したように、上から12枚のカードを左から右に向かって並べてください」と言います。残りのカードはわきに置かせます。

「それではカードをおぼえてもらいます。aさんは思った数の分だけ左端から数えて、その枚数目のカードをおぼえてください。bさんは右端からその数の分だけ数えて、その枚数目のカードをおぼえてください」と指示します。もちろんそれぞれのカードを忘れないように念押ししておきます。

そのあと、「カードをそろえていただきますが、順番が変わらないように、このように左右から中央に向かってそろえてください」と言いますが、そのとき後ろを向いたまま、左右の手でカードをそろえる動作をやりながら言います。

「ではそろえたカードを表向きのまま、私にください」と言って、背後で左手にパケットを受け取ります。「お2人のカードを見つけるために、不思議な混ぜ方をします」と言って、後向きのまま、

クロンダイクシャフルします。フェースとバックから1枚ずつ抜いて左手に取り、取ったカードは左親指のつけ根のほうに押しつけるようにして、そのまま2枚ずつ取り続けます。

前に向き直りますが、左からまわるようにして、左手に持ったポケットはそのままの位置に保つようなまわり方をします。

ポケットから1枚のカードを取る演技をして、「ここに魔法のカードがあります。いまは見えませんが、このカードはどんなカードにでも姿を変えることができます。これをこちらのカードの中に入れます」と言って、ポケットの中に入れる真似をします。

「まず魔法のカードを見えるようにします。わかりやすいように赤い裏のカードに変えましょう」と言って、ポケットに対して魔法をかけます。それからポケットを裏向きに返します。「よく見ていてください」と言って、トップから1枚ずつ右手に取っていきます。順番が変わるような取り方です。そして赤裏のカードが左手のトップに出たところでストップします。

赤裏が奇数枚目であれば、左手のカード全体を右手のカードの上のせてそろえ、偶数枚数目であれば、赤裏のカード1枚を右手のカードの上のせて、右手のカードを左手のカードの上のせてそろえます。いずれの場合も、トップから2枚目の下にブレイクを作ります。

ちなみに、赤裏のカードが奇数枚目に出てきた場合は、それはaさんがおぼえたカードで、偶数枚目に出てきた場合は、それはbさんがおぼえたカードです。

トップから2枚目にどちらの客のカードがあるかによって、その客に向かって「あなたがおぼえたカードは何でしたか」とたずね、ダブルターンオーバーしてその客のカードであることを見せます。

2枚を裏返し、トップの1枚を右手に取り、「このカードはどんなカードにでも姿をかえられると言いました。あなたのカードは何でしたか」と、もう1人の客にたずねます。それから右手に持っているカードを表向きにします。「ほら、あなたのカードに変わっています」と言います。

* 備 考 *

ダフィの原案から始まって、ここまで説明するのにずいぶん紙幅を使ってしまいましたが、それなりの成果はあったと思います。少なくとも私にとっては、演じる気の起きないものから、演じる気持ちになれるものにたどり着いたと思います。

おそらくこれからの私の人生は、このようにカードマジックを深く考えることによって、いままでのカードマジックグレードアップすることに、喜びを見出すことになるのだらうと思います。

トリプルフリッパント

= 加藤英夫、考案日不明 =

このトリックに使われているフリッパントという技法は、ルーイ・シモノフの考案になるもので、雑誌“アポカリプス”、1978年9月号で発表されました。

* 現象 *

よくシャフルしたデッキを左手に持ち、左手を上下に一振りすると、トップに4枚のJが表向きに現れます。Jを表向きにしたまま左手を一振りすると、表向きの4枚は全部Qに変化します。さらに一振りすると、4枚は全部Kに変化します。

* 準備 *

トップより4枚のK、4枚のJ、4枚のQとセットします。それらの下のカード(トップから13枚目のカード)をクリンプしておきます。

* 方法 *

トップの13枚が変わらないようなシャフルを行ったあと、トップ付近の10枚ぐらいを広げて、「どこに何のカードがあるかわかりません」と言って、カードを閉じながら、トップから8枚目の下にブレークを作ります。「でも絵札を見つけるのは簡単です。このようにカードを振ればよいのです」と言って、以下に説明するフリッパントムーブという技法で、ブレークより上の8枚を表向きにひっくり返します。

いったん少し左手を下げて、その反動で急激に上に上げます。そのとき、ブレーク上のカードを押さえる力はゆるめておきます。そうすると、指先の方が大きく動くため、ブレークより上のカードの右側が図1のように持ち上がって、空中で回転します。



表向きに戻ったカードを図2のように左手のカードの上に受け止めます。



8枚のカードが表向きになりましたが、右手で上の3枚を広げ、4枚のJを見せます。図3。カードを閉じて、クリップカードの上にブレイクを作ります。



「Qを現すには、また振ればよいのです」と言って、フリップアンドムーブを行ってブレイク上のカードをひっくり返します。そして表向きになった4枚のQを広げて見せますが、そのとき4枚のQの下の4枚の裏向きのカードまでを少し広げ、右手の表向きのQをデッキの上でそろえるとき、4枚の裏向きのカードの下にブレイクを作ります。

「もういちど振るとどうなるでしょう」と言って、フリップアンドムーブでブレイク上のカードをひっくり返します。表向きに現れた4枚のKを広げて、テーブルに落とします。「もちろん4枚のKが現れます」と言って終わります。

リモートコントロールポーカー

=ピーター・ダフィ、“カードコンスピラシー第1巻”、2003年=

これは論理的に分類すれば変化現象ではないかもしれませんが、観客が見た印象としては、バラバラの5枚がロイヤルフラッシュの5枚に変化したように感じるという、奇妙な現象です。

* 現象 *

4枚ずつのパケットを5組作り、それぞれのパケット中の1枚だけを他のカードと逆向きにします。それから4組を重ねて集めます。そのまま全体を広げると、裏向きのカードの中に5枚だけ表向きになっていて、それら5枚はランダムなカードです。カードをそろえ、ひっくり返してから広げると、当然ながら表向きのカードの中に裏向きのカードが5枚あります。

20枚のカードを相手に渡し、CATOの操作で裏表をバラバラに混ぜさせてしまいます。すなわち、好きなところからカットしてからトップの2枚をひっくり返す、というのを好きなだけやらせるのです。最後に左右2組にディールさせて一方をひっくり返して重ねさせます。相手がでたらめに混ぜたはずなのに、カードを広げると、5枚のカードだけが裏向きになっています。そしてそれら5枚を表向きにすると、ロイヤルフラッシュの5枚になっています。

* 方法 *

ロイヤルフラッシュの5枚をトップにカルし、その上に5枚をシャフルして加えます。

デッキをカットしますが、間にブレークを保ち、リフルフォースしてブレークからカット、デッキを相手に渡します。

テーブルに左から右へと1枚ずつ置いていき、5組の山に4枚ずつのカードをディールします。残りのカードは使わないのでわきに置きます。

「ポーカーの強い手をディールできたか見てみましょう」と言って、各パイルのトップカードを表向きにさせます。「それほどたいした手ではありませんね。でもこの5枚が不思議さを生み出すのです」と言います。

表向きのカードはそのままにして、各パイルを重ねて集めます。重ねたあと広げて見せます。反対にひっくり返して、表向きのカードの中に5枚だけ裏向きのカードがあることを印象づけます。

「いま5枚のカードが逆向きになっていますが、これからあなたにカードをランダムにひっくり返してもらいます。私はあなたの心を支配して、不思議な結果になるように導くことにします」と言います。

20枚を相手に渡し、CATOハンドリングを相手にやらせます。(トップの2枚をひっくり返し、好きなどころからカットする、という操作を好きなだけやらせるのです)。

最後にロイヤルフラッシュの方を裏向きになるか表向きになるかを見ている。「これだけでたために裏と表を混ぜたのに、最初の通りに5枚だけがひっくりか返っていたとしたら面白いと思いませんか」と言います。相手からカードを受け取り、ロイヤルフラッシュの5枚が裏向きになるようにして、テーブルにスプレッドします。そして5枚だけがひっくり返っているのを見せます。

裏向きの5枚を抜き出して、5枚を声を出してカウントします。「ほらもと通り逆向きのカードが5枚になっています。うまくいきました。でも待ってください。あなたは5枚をすごいカードに変化させてくれました」と言って、5枚がロイヤルフラッシュであることを見せます。

* 備 考 *

原著の説明では、CATO操作の最後の部分、2組に分けて一方をひっくり返して重ねる、というのも相手にやらせています。そのように行くと、最後に2組に分けるということが目立ってしまいます。相手にやらせるよりも自分が操作した方がスムーズにできるということも含めて、私はつぎのようにやります。

5組のパケットを重ねたあと、「カードの裏表の向きをバラバラにします。このように2枚のカードを取りますから、あなたは“そのまま”とか“ひっくり返す”とってください。あなたの指示通りにカードを置きます。この2枚はそのまま置きますか、それともひっくり返しますか」と問いかけます。

“そのまま”と言われてたらそのままの向きで2枚を置き、つぎの2枚を取ります。”ひっくり返す”と言われてたら、ひっくり返してから先に置いたカードの上に置きます。それをすべてのカードでやります。

「つぎは4枚ずつでやります」と言って、4枚のカードを取り、「これはどうしましょうか」と言って、以下相手の言った通りの向きで4枚ずつ置いていきます。

「最後は2組に分けます」と言って、左右2組にディールします。ロイヤルフラッシュのカードがどちらを向いているかを確認しておきます。そして「どちらかをひっくり返します。どちらをひっくり返しますか」とたずね、言われた方をひっくり返して他方に重ねます。

ロイヤルフラッシュのカードが裏向きなら、そのままパケットをスプレッドします。そして原案の解説にあるようなセリフを言って、5枚のロイヤルフラッシュを現します。

ロイヤルフラッシュのカードが表向きなら、両手を立ててロイヤルフラッシュのカードの裏面が観客に向くように広げ、観客から見て裏向きのカードをアップジョグしていきます。そして原案の解説にあるようなセリフを言って、5枚のロイヤルフラッシュを現します。

モシャスカード

= 加藤英夫、2001年12月19日 =

* 方法 *

青裏のデッキと赤裏のスペードのAを使うとします。赤裏のスペードのAをデッキの上から3分の2ぐらいの位置におき、それより4枚下に青裏のスペードのAを置いておきます。

カードをスプレッドして、色違いのカードが入っているので驚いた表情を見せ、「このカードは変身の魔法を使っているんです。モシャスといって、他人の姿に変身できるんです。いまは裏模様を変身させていますが、表を変身させられることもお見せしましょう」と言って、カードを閉じます。

「1枚のカードを指さしてください」と言ってカードを広げ、赤裏のカードが出てくるまえの1枚を指させます。指さされたカードをアップジョグして、そのカードの表面を見せ、よくおぼえてもらってから右手を下げる時、コンビンシングコントロールを行います。そしてスイッチして抜いたカードをスプレッドの下に保ちながら、カードを広げ続け、赤裏のカードをアップジョグしますが、相手のカードを赤裏のカードの下にすべり込ませます。そして相手のカードの下にブレイクを作ります。

現在、相手がおぼえたカードだと思われるカードが上の方でアップジョグされていて、赤裏のカードが下の方でアップジョグされています。アップジョグされているカードを右手で抜いて取り、「選んだのは何のカードでしたか」とたずねます。そしてそのカードをデッキのトップに置きます。

ここでアップジョグされている赤裏のカードより上のカードを右手で取り上げますが、そのとき天海アディションを行います。すなわち、右手で上のポケットを前上方に運ぶとき、ブレイクの下にある1枚を前に押すことによって、アップジョグされている赤裏のカードにそろえてしまうのです。右手のポケットをテーブルに置き、すぐに突き出ている2枚をダブルターンオーバーして表を見せ、相手が選んだカードと同じであることを見せます。

2枚を裏返して、上の1枚(赤裏)をテーブルに置きます。手に持っているポケットをテーブル上のポケットの上に重ね、全体を取り上げます。赤裏のカードはテーブルに置いたままです。

現在トップから5枚目に、赤裏のカードと同じ青裏のカードがあります。「もういちどやりましょう」と言って、カードを両手の間に広げ始め、トップから5枚のカードをスライドアウトします。そして相手に1枚のカードを指させ、そのカードをアップジョグしてカードを閉じるとき、スライドアウトしたカードをアップジョグしたカードの下にすべり込ませます。

アップジョグされたカードを指さし、「こんどは違うカードが選ばれました」と言って、続いてテーブルの赤裏のカードを指さし、「ですからこのカードがまた変身します」といいます。「選ばれたカードは」と言いながら、天海アディションを行いながらアップジョグカードより上のカードを右手で前方に運びながらカットして、テーブルに置きます。ダブルになったアップジョグカードを表向きに返して、「〇〇の××です」といって表向きに見えたカードの名前を言います。

右手で赤裏のカードを取り上げ、左手の上のカードに魔法をかけてから表向きにして、同じカードに変身したのを見せます。そのカードを表向きに左手のカードの上のせ、「でも全部同じになったわけではありません」と言いながら、セカンドディールで青裏のスペードのAをテーブルにディールします。

現在のデッキのトップの表向きの2枚をダブルターンオーバーを2回行って、裏が青であることを見せてから、また表向きにします。「こちらのスペードのAは青裏ですが」と言って、つぎにテーブルのカードを指さし、「こちらは赤裏です。でも魔法をかけてやると、裏も変身します」と言って、そのカードに魔法をかけ、そして右手で取り上げてひっくり返し、裏が青に変化したのを見せます。

そのカードを表向きにして左手のカードの上に置きます。そしてセカンドディールして右手に取り、「同じカードが2枚あっても困りますので、これはどけてしましましょう」と言って、そのカードを裏面を見せないように注意して、ポケットに入れてしまいます。現在デッキの上には2枚の表向きのカードがありますから、ダブルターンオーバーを行います。これでデッキはノーマルな状態になりましたから、つぎのマジックに続けます。

ユーレイの正体

= 加藤英夫、1998年12月16日 =

多くのカードをセットしておく必要なマジックを演じる場合、いつどのようにセットするか、セットしたデッキをどのように取り出すか、などの問題があります。セットの必要なマジックを最初に演ずる、というのが手っ取り早い解決法ですが、必ずしもそのマジックがスターターに向いているとは限りません。デッキをスイッチするという方法もあります。セットする枚数がそれほど多くない場合、私はなるべく観客の前で演技中に堂々とセットする、という手法を取り入れようと考えます。

これから説明するマジックは、その手法が演出とみごとに融合した例です。演技の初めに観客の目の前でセットすることによって、ストーリーの導入部を印象づけることができるので、初めからセットしておくよりも効果が上がるのです。マジックの秘密の部分を隠したり正当化するのに、ミスディレクションとかカモフラージュなどが研究されてきましたが、演技の構成、ストーリーづけなどが、同じような働きをすることがあることをこのマジックは示しています。

* 現象 *

2枚の表向きのカードの間に1枚ずつ裏向きのカードが出現していき、計4枚の裏向きカードがはさまれます。ここまでは'APEX ACE'の現象です。そのあと出現したバラバラの4枚のカードが、瞬間的に4枚のAに変化します。

* 方法 *

デッキを表向きに両手の間に広げて、2枚の同色絵札を抜き出して、表向きにテーブルに置き、「この2枚はユーレイハンターです」と言います。黒いJを抜き出したとします。

「つぎにユーレイカードを抜き出します。」と言って、表を自分に向けてデッキを両手の間に広げ、4枚のAをフェースに抜き出します。観客に表を見せてはいけません。フェースの4枚を取る振りをして、Aの下の4枚のカードをいっしょに右手に取り、左手でデッキを裏向きにし、その上に右手のカードを裏向きにしてのせます。

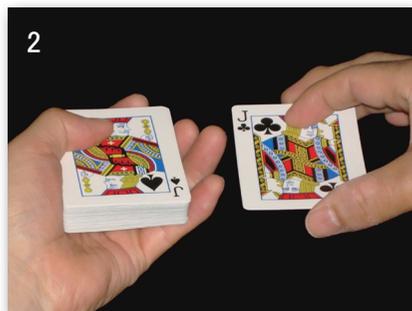
すぐに上の4枚を広げて右手で取り、図1のように右手を返して4枚の表を見せて、「これらは変哲もないバラバラのカードですが、じつはこれらがユーレイなんです」と言って、裏向きにしてデッキの上でそろえますが、トップカードの下にブレークを作ります。



「ユーレイが姿を隠します」と言って、ブレイクを利用してダブルカットを行います。4枚のAはトップから4枚目以降に配置されました。ここでトップ7枚を保つシャフルをやります。

「いまからユーレイハンターがユーレイを捕まえます」と言いながら、右手で1枚のJを取りにいけますが、左手はトップカードの下にブレイクを作ります。そのJをトップに表向きに置き、もう1枚のJをその上に表向きに置きます。

右手でブレイク上の3枚をつかみ、上のJをデッキの上に引いて取り、図2、「まだ2枚の間には何もありません」と言います。



右手のJ(と裏向きの1枚)をデッキの上ののせます。魔法をかけてから、トップの3枚を広げて右手に取ります。右手を図3のように返します。「ほら、クラブの5が捕まりました」と、はさまれたカードの名前を言います。そのとき左手はトップカードの下にブレイクを作ります。



右手をもとに向きに戻して、3枚をデッキの上でそろえ、ブレイク上の4枚を右手で取ります。「Jの間には」と言いながら、フェースのJをデッキの上に引いて取り、「1枚」と言いながら裏向きのカードを左手のカードの上に引いて取ります。「のユーレイカードがあります」とセリフを続けながら、残りのJ(と裏向きの1枚)をその上に置きます。

デッキに対して魔法をかけてから、トップの4枚を広げて右手に取り、右手を返して、「ほら、2枚目のユーレイカードが捕まりました」と言います。そのときデッキのトップカードの下にブレイクを作ります。

右手をもとに向きに戻して、4枚をデッキの上でそろえ、ブレイク上の5枚を右手で取ります。「Jの間には」と言いながら、フェースのJをデッキの上に引いて取り、「1枚」と言いながら裏向きの1枚を左手のカードの上に引いて取り、「2枚」と言っつぎの裏向きのカードを取ります。「のユーレイカードがあります」とセリフを続けながら、残りのJ(と裏向きの1枚)をその上に置きます。

魔法をかけてから、トップの5枚を広げて右手に取りますが、その5枚以降の4枚を少し押し出しておきます。右手を返して、「ほら、3枚目のユーレイカードが捕まりました」と言います。そのと押し出した4枚の下にブレイクを作ります。

右手をもとに向きに戻して、5枚をデッキの上でそろえ、ブレイク上の9枚を右手で取ります。「Jの間には」と言いながら、フェースのJをデッキの上に引いて取りますが、こんどはそのJの下にブレイクを作ります。「1枚」と言いながら裏向きの1枚を左手のカードの上に引いて取りますが、そのときブレイク上のJを右手のカードの下にスチールします。「2枚」と言っつぎの裏向きのカードを取り、「3枚」と言っつぎの裏向きのカードを取り、「のユーレイカードがあります」とセリフを続けながら、残りのJ(と裏向きの1枚)をその上に置きます。

魔法をかけてから、トップの6枚を広げて取り、それらをテーブルに置き、広く広げます。「これで4枚のユーレイカードが捕まりましたが、ユーレイの正体をお見せしましょう」と言っつから、Jの間にはさまっている4枚を、1枚ずつ表向きにして、4枚のAを現します。

リスウインドルド

= カレブ・ワイルズ、雑誌“マジック”、2006年6月 =

“Card Magic Library” 第2巻、117ページに解説した、ジェニングスの’ウエルオイルドリセツト’のハンドリング違いのバージョンです。

* 準備 *

トップより4枚のK(色は交互に)、2枚の黒いA、1枚の赤いA、、、とセット。

* 方法 *

トップの4枚のKを表向きにして、「ポーカーでは、5枚のカードで勝負しますが、わかりやすいように4枚のKで説明します。このようなフォーカードをいきなり自分に配ったとしたら、誰でもあなたを疑います。ですから、ギャンブルでは、パートナーが必要になるのです。今日はあなたにパートナーをやってもらいます」と話をします。

4枚のKを広げてそろえるとき、下のAを3枚シークレットアディションして、その7枚で4枚として見せるブラウエアドオンを行います。そしてトップから5枚を取り上げます。その5枚は、K2枚の間にA3枚がはさまれたものとなります。そのパケットの表をちらっと見せてから、相手の前に置き、押さえてもらいます。

「ゲームではわざと自分に良くない手を配ります」と言っつ、表を上にしたカードを広げ、まずフェースから10枚程度をバックにまわします。それから3枚の黒い大きい数のカードをアップジョグし、最後にK2枚を1枚としてアップジョグします。

アップジョグしたカードを抜いて、残りのカードは捨てます。5枚を表向きにして、フェースの1枚を右手に持ち、「黒い数のカードはよくない手だとします」と言っつ、その1枚を他のカードの下に

入れます。

エルムズレイカウントを行って、4枚の黒いカードを見せます。最後の2枚を下にまわします。

5枚を裏向きにして、トップの黒いカードを表向きにして見せます。裏向きに戻します。トップの4枚をブロックプッシュオフしてひっくり返し、Kになったのを見せます。裏向きに戻して、上の1枚をテーブルに置きます。

ボトムカードを引き抜いて、トップに表向きに置き、それをトップで裏向きにして、トリプルターンオーバーを行い、Kに変化したのを見せます。3枚を裏向きに戻して、上の1枚を先にテーブルに置いたカードの上に置きます。

指を鳴らし、3枚を表向きにします。フェースカードがKに変化しました。バックの1枚を左に半分引いて、まだ黒いカードなのが見える状態にします。ここで黒いカードの上の隠れているKを左手の指で左に引いて、黒いカードがKに変化したのを見せます。そして3枚を閉じて、裏向きにテーブルの2枚の上に重ねます。

「あるとき、黒いカードだったのをKにすり替えたじゃないかという人がいました。そこで私はカードの裏のリセットボタンを押して、Kなんか持っていないよと言って、カードを見せました」と言って、リセットボタンを押す真似をして、カードを表向きにしてエルムズレイカウントして、4枚の黒いカードに見せます。そして5枚をデッキの上に捨てます。

客の手の下からカードをもらいます。「もちろん、私はもういちどKにすり替える必要がありました。まだKはこちらにありますよ」と言って、ジェニングスのリズムカウントのバリエーションを行います。すなわちパケットを右手のビドルポジションに持ち、3枚を左手に引いて取ると、右手にダブルが残ります。右手を返してそれがKであるのを見せ、表向きにパケットの上に置き、また裏向きに戻して、上の1枚をテーブルに置きます。

トップカードを右手に取り、左手を返してボトムのKを見せます。左手を戻して、上の1枚をテーブルのカードの上に置きます。続けて右手を返してKを見せ、それを裏向きにしてテーブルのカードの上ののせます。そして左手を返してKを見せ、2枚を裏向きにテーブルのカードの上に重ねます。

「このギャンブルテクニックで問題なのは、あなたのパートナーがあなた自身をだまそうとしたときです。こんなふうに、KをAに変えてしまったりするのです」と言って、5枚を表向きにして、エルムズレイカウントして、全部Aに変化したのを見せます。

似ているカード

= 加藤英夫、2012年10月13日 =

フォーオブアカインドを現すには、たいていセットが必要だったり、4枚を何らかの口実でカルして集める必要があります。ところがこの作品は、何にもセットされていない状態で演じられます。しかもいままでのカードマジックになかった演出を取り入れて、私のようなコミカルな演技のマジシャンにとっては、間違いなくレパートリーとして活用していただける作品だと自負します。

* 方法 *

シャフルされたデッキを使います。デッキをドリブルオフして相手にストップをかけさせます。ストップがかかったら左手のトップカードをプッシュオフして、左手を上げてそのカードの表を相手に見せておぼえてもらいます。

左手を下げながら、選ばれたカードを引いて、そのカードの下にブレイクを作ります。右手のポケットをその上にかけて、すぐ右手のポケットのボトムに選ばれたカードをスチールして、右手をのポケットを持ち上げつつ、左手のトップカードをプッシュオフして、右手人さし指でそのカードを指さしつつ、「このカードを忘れないでください」と言います。'ドントフォーゲットグリンプス'です。

右手のポケットを左手のポケットに重ね、デッキを相手に渡し、よくシャフルしてもらいます。

相手のカードがスペードの4であると仮定します。シャフルされたデッキを受け取り、表向きに持ちます。「これからあなたが選んだカードに似ているカードを何枚か使います」と言って、デッキを両手の間に広げますが、フェースから20枚ぐらいのカードをいっぺんに広げます。

そして選ばれたのと同じ数のカードを見つめます。フェースから12、3枚目にあるのが理想ですが、とりあえずそのあたりに1枚目があるものとして説明します。

その4のカードの手前のカードの手前でカードを分けますが、左手は分けたあとのフェースカード2枚の下にブレイクを作ります。右手のカードを裏向きにしてテーブルの右の方に置きます。

左手のフェースカードを指さして、「このカードはあなたが選んだカードに似ているはずですか」と言います。相手は見えているカードによっては、肯定するかもしれませんが、たいていの場合には否定するでしょう。もしもそれが選ばれたのと同じ色のカードなら、たとえばこの例ではクラブのカードであるとしたら、「少なくとも色は同じはずです」と言います。

ブレイクを利用してフェースの2枚を裏返し、アルトマントラップの位置に受け止めます。左親指のつけ根に受け止めるということです。「このカードはこちらに置いておきます」と言って、左手を

右に置いた裏向きのポケットK近くに運び、アルトマントラップされている2枚をプッシュして右手で取り、テーブルのパイルの上にディールします。

もしも最初に広げた部分に同じ数のカードがない場合は、同じ数のカードが見えるまで送り、同じ数のカードの12、3枚手前で分けて、いったん右手のカードを左手のカードのバック側にまわします。そして前述のように行います。

逆に最初に広げたときにフェース近くにあり過ぎる場合は、その手前で分けるとテーブルに置くポケットが少数枚過ぎますので、そのカードがなかったことにして、そのカードを含む何枚かをバックにまわしてしまいます。

以上を繰り返して、4つのパイルを作り、それぞれ似ているカードとして見せたカードと同数カードをダブルで各パイルのトップに置きます。

とにかく同数カードの手前の手前で分けたときに、右手のカードが少なくなる状況では、バックに適切な枚数をまわしてから続ければ、だいたい12、3枚のポケットを作ることができます。

4枚目については、右手に分けたカードをテーブルに置くのではなく、左手のカードのバックにまわします。そしてフェースの2枚を裏返して右手に持ち、左手で残りのカード全部を裏返し、その上に右手の2枚を置きます。

カードを分けて左手のフェースカードを指さすとき、その都度、「このカードはあなたのカードに似ているはずですよ」というセリフを言いますが、「もしも選ばれたカードと色違いだったり、何にも似ている要素がない場合には、2枚を裏返したとき、「裏模様はそっくりでしょう」とか、カードを弾いて「紙質は同じはずですよ」とか、「この四角い形は似ていませんか」などというジョークを言うようにします。

そのようにして4つのパイルを置いたら、それぞれのトップカードを指さして、「これらのカードはすべてあなたのカードに似ているカードです。あなたのカードは何でしたか」とたずねます。

「さあ、これらのカードがどのくらい似ていたか、もういど見てみましょう」と言って、選ばれたカードのあるパイル以外の3つのパイルのトップカードを表向きにします。「ほらよく似ているじゃないですか。そしてこれがあなたの選んだカードです」と言って、選ばれたカードを表向きにして終わります。

魔法をかけると

= 加藤英夫、2010年10月18日 =

* 現象 *

よくシャフルされたデッキからマジシャンが4枚のカードを抜き出し、相手の中から1枚のカードを選びます。選ばれなかった3枚のうち1枚の表を見せ、それを裏向きにデッキの中央に入れて、突き出させておきます。あと2枚のカードも同様に表を見せてから、同じように裏向きにデッキの中央に入れて、突き出させた状態にします。それら3枚は数がバラバラでした。

相手が選んだカードでファンに広げられた3枚に魔法をかけます。そうすると、それらのカードはすべて選ばれたカードの数と同じ数になってしまいます。

* 方法 *

相手によくシャフルされたデッキを受け取り、表向きにさっと両手の間に広げて、「このようにあなたがよくシャフルしたカードを使うということが重要なポイントです」と言います。そのとき、左端から2枚目のカードをおぼえます。もしも左端と左端から2枚目が同じ数であるとまずいので、その場合は適切なところからカットしてから続けます。

カードを立てて表を自分の方に向けて広げていき、トップから2枚目と同じ数のカード3枚と、その他のカード1枚をアップジョグします。相手に表を見せてはいけません。抜き出した4枚を裏向きにテーブルに横一列に置きますが、どの1枚が違う数かをおぼえて置きます。デッキを裏向きに左手に持ちます。

ここで一種のマジシャンズチョイスを行います。これは同数カードをフォースすると同時に、残りの3枚の順番を特別な順番にするという、二重の構造を持ったフォースです。

「どれか1枚のカードを取ってください」と言って、1枚のカードを取らせます。それが同数カードであれば、それが選ばれたものとして、相手の前に置かせます。「残りのカードはこちらに置きます」と言って、デッキの上に置きますが、同数カード、違う数のカード、同数カードの順で置きます。

相手が違う数のカードを取った場合には、すぐ「それを好きなカードの上のにせてください」と言って、3枚のうちのどれかにのせさせます。「残りの2枚のうちの好きな方をこの上のにせてください」と言って、残りの2枚のうちの1枚を2枚重なっているカードの上のにせさせます。「最後に残ったカードを相手の前に置かせます。そして3枚のカードをデッキの上に置きます。

いずれの場合でも、相手の前には同数カードが置かれ、デッキのトップの状態は、同数カード、違う数のカード、同数カード、違う数のカード、同数カードとなります。

なお、以上の操作の中で、トップから2枚目の下にブレークを作っておきます。

「選ばれなかった3枚をお見せしておきます」と言って、ダブルターンオーバーしますが、つぎのようにやります。

右手の人さし指と親指をブレーク上の2枚の右サイドに当てて、すぐ左親指でその2枚をプッシュオフしますが、その2枚のあとの2枚も少しずらしします。そして右手が2枚を横向きに返すとき、ずらした2枚を戻してそれらの下にブレークを作ります。すなわち、ターンオーバーするときにつぎのダブルターンオーバーのゲットレディを行うのです。なお、表向きに返した2枚は、デッキより少し手前に突き出させて置きます。そして「これは〇〇の××です」と、そのカードの名前を言います。

表向きの2枚の手前エンドを右手でつかみ、向こうに向かって裏返し、その2枚でプッシュインチェンジを行います。そして残った1枚を図1のように左に傾けます。



ブレーク上の2枚をターンオーバーしますが、やはりつぎの2枚の下にブレークを作ります。そして返した2枚を最初に入れたカードの下に入れてプッシュインチェンジを行い、斜めになっているカードの下にそろえます。

つぎの2枚でも同じことをやりますが、こんどはブレークを作りません。そして3枚とも斜めにそろえてから、動作を続けて3枚を図2のように突き出たままファンに広げます。



相手の前にあるカードを受け取り、表向きにして、「あなたが選んだのは〇〇の××でした」と、そのカードの名前を言います。「このカードで魔法をかけると」と言って、表向きに持ったそのカードで突き出てファンになっているカードに魔法をかけます。そしてそれらが全部同じ数のカードに変化したのを見せます。

スーパーオプティカルイリュージョン

= ジョージ・サンズ、雑誌“ヒューガードマジックマンズリー”、1946年12月 =

パケットトリックで一世を風靡したと言えるものに、ルイス・タネンから1950年代に売り出された‘ギャンブルアンブル’があります。日本では、‘ギャンブラーズドリーム’として発売されました。その原形の作品です。まさに変化現象の特集の最後を飾るのにふさわしい、美しい作品だと思います。以下を読むまえに、ぜひ“Video Lesson”の映像 NO.61 をご覧になってください。

一流マジシャン、ルイス・デ・マトスが一流の舞台で、このカードマジックをステージマジックとして演じているのです。この演技を見ると、カードマジックというものの中には、セリフを言わなくてもストーリーの流れを感じさせるものもあるのだと、私は感銘を受けました。

それはただ体を動かすだけの体操ではない、バレエのような流麗なアートがあるように、ただビックリ箱を続けて開けるような不思議さの羅列ではない、不思議が織りなす幻想の時間、空間を生み出すカードマジックの存在を示してくれるものです。

* 準備 *

赤裏の数のカード4枚を表向きにテーブルに置き、その上に4枚の青裏のQをのせますが、それら8枚に上向きのブリッジをかけて、青裏デッキのトップにセットします。

* 方法 *

「奇妙な目の錯覚現象をご覧にいれます。昔から、目で見えるものを信じよ、という言葉があります。皆さんもこれから見ることをぜひ信じてください」というセリフで演技を始めます。

デッキを取り上げ、「全部ではなく、何枚かのカードを使います」と言って、ブリッジがかかっている8枚をさり気なく取り、デッキを裏向きにリボンスプレッドして、裏が青いことを見せます。それからカードをそろえ、デッキを表向きにわきに置きます。

8枚のパケットを青い裏面を上にして左手に持ち、体を真左に向けて、パケットの裏面をまっすぐ観客に向けてかまえます。

「何枚のカードがあるか見てみましょう」と言って、ここではバックルカウントせず、上の3枚を広げて、4枚として見せます。「4枚ですね。いつもは3枚でやるのですが、今日は4枚でやってみましょう」と言います。

トップカードを取り、さり気なく見せてからバックにまわします。表面をみせてはいけません。「もういちど数えます」と言って、バックルカウントで4枚にカウントします。すなわち、1枚目を右手に

取り、2枚目をその下に広げて取り、つぎはバックルして5枚を重ねたまま取り、最後の1枚は弾いてからいちばん手前にのせます。そしてそろえます。以上で4枚の青裏カードをカウントして見せました。

「よく見ていてください」と言って、バックルカウントで4枚にカウントします。4枚目に表向きのカードが現れます。いちばん手前に置きます。以上をあと3回繰り返します。全部表向きになりました。

「これらのカードの裏の色は青でした」と言って、バックルカウントを行います。そして1枚のカードが左手に残ったら、「表は数のカードでしたが」と言ってから、それを表向きに戻します。「でもQに変わっています」とセリフを続けます。そのQをいちばん手前にのせてそろえます。それから手前に3枚のQをバックにまわします。

「全部Qになってしまいました。そして裏の色は青でした」と言って、パケットをひっくり返し、バックルカウントをやって、全部青裏に見せます。最後の1枚はやはり手前に置きます。

「こんどは色についての錯覚です」と言って、バックルカウントを行います。4枚目が赤裏です。それを手前に置き、あと3回バックルカウントを繰り返し、1枚ずつ赤裏のカードに変えていきます。全部赤裏に変わりました。

パケットを表向きにして、右手で表向きのデッキを取り、左手のパケットの上のにのせます。そして右親指で下の4枚を弾き落として、4枚の上にブレークを保ちます。

「色の錯覚は全部のカードに起こります」と言って、右親指でブレークを保持したままヒンズーシャフルの位置に持ち、ヒンズーシャフルしながら、ときどき右手を返して赤裏を見せます。全体が赤裏になったように見えます。最後にブレークの下に4枚を置きます。その4枚の下に左小指でブレークを保持します。

ブレークを保ったまま、デッキを右に戻し、裏向きになったらブレーク下の4枚を左手にギャンブラーズコップの位置に持ち、そこで残りのデッキをファンに広げます。赤裏のカードはファンの陰に隠れます。そしてファンを何回か返して、青裏に戻ったことを見せ、「これでもとに戻りました」と言います。

赤裏のカードをうまく処理して、つぎのマジックに進みます。

* 備 考 *

ビデオレッスンの映像 No.61 で、ルイス・デ・マトスはこのトリックを舞台上で演じていますが、さすがにポルトガルを代表する一流マジシャンの彼の演技からは、大切なことがいくつも学べます。

まず第一に、大きなサイズのカードを使っていること。もちろん観客によく見えるように、ということでも当たり前かもしれませんが、大きいサイズの方が厚みが目立たない、ということもあるのです。

つぎに後向きで演じるという大胆な発想です。舞台の上で演じるのですから、観客によく見えるように、という理由を言ってそのように演じれば、後向きになることは問題ではありません。そのことによって、体の左でバックルカウントを行うと、下手側の観客に見えない、という問題も解決されています。

そしてバックルカウントで、4枚目のカードをすぐ手前にのせないで、4枚のカードをファン状の状態によく見せていること、これはクローズアップマジシャンには気づきにくいポイントかもしれません。目の前で演じるなら、ただカウントしただけで現象が明確に伝わりますから。

そして最後に、現象の起承転結として、もっとも顕著な違いが、ジョージ・サンズの原案との間にあります。それは最後に、裏の変化で終わるか、表面の変化で終わるかの違いです。私はこの点が、さすがルイス・デ・マトスだとなった点です。

表面の変化で終わるやりの方が素晴らしいということを、私は文章で説明することはできません。マトスの演技を見て、そのことをあなたに感じていただく以外ないのです。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第 27 号

発 行 2014 年 7 月 4 日

著 者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

